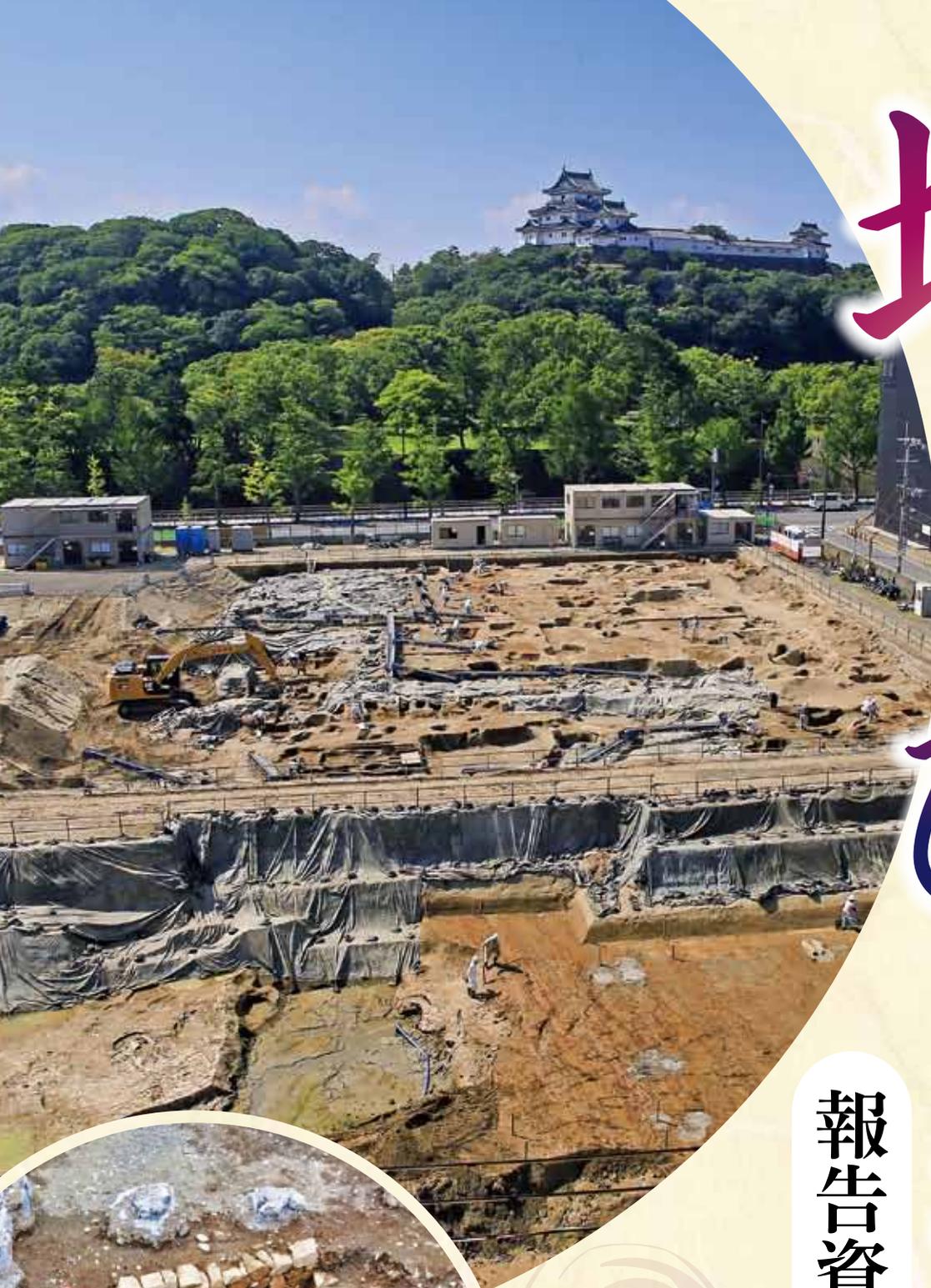
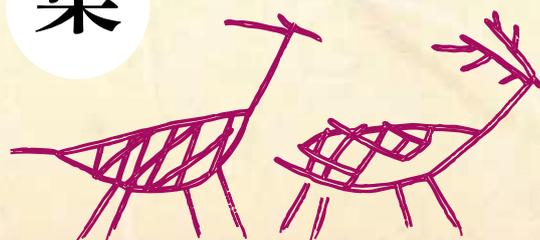


地宝のひびき

報告資料集



(写真)
上：和歌山城跡
調査風景（北から）
下：新宮城下町遺跡
石積み地下式倉庫（東から）





新宮城下町遺跡 調査地遠景（北西上空から）



和歌山城跡 半地下式カマド（北西から）

開催にあたって

『地宝のひびき－和歌山県内文化財調査報告会－』は、文化財に対して共通の理解と知識を育んでいただくことを念頭に、県内の発掘調査の成果などを各地域の文化財担当者が報告し、その成果をいち早く県民の皆様を提供することを目的として企画したものです。

県教育委員会や県内各市町村の文化財担当者と連携し、平成18年度に第1回を開催して以来、おかげさまで途絶えることなく14回目を迎えることができました。

近年、和歌山県内では中世及び近世の山城や城館の調査が数多く行われており、昨年度も同様の傾向にあります。こうした状況から、和歌山市和歌山城跡三の丸の調査を初め、白浜町安宅本城跡、上富田町坂本付城跡、新宮市新宮城下町遺跡などの調査から得られた様々な新しい知見を含めて報告して頂きます。

また、本誌に掲載できなかつたものの、県内ではこれ以外にも多くの発掘調査がおこなわれており、その一つ一つが地域の歴史を知る貴重な手がかりとなっています。

今回開催しました『地宝のひびき』を通して、少しでも文化財を身近なものと感じ、また遺跡の保存や活用についても考えをめぐらせていただく機会にさせていただけたらと考えています。

最後になりましたが、この報告会を開催するにあたりまして、ご協力を頂きました多くの機関、関係者の皆様に深く感謝の意を表する次第です。

令和元年7月13日

公益財団法人 和歌山県文化財センター
理事長 櫻井敏雄

開催日程

地宝のひびき ―和歌山県内文化財調査報告会―

■開催日時：令和元年7月13日（土）13時00分～17時00分

12時30分 受付開始

13時00分 開会挨拶

13時05分 報告Ⅰ 「県内最大級の首長墓を掘る・54年ぶりに開かれた横穴式石室
―和歌山市 天王塚古墳の発掘調査―」

和歌山県立紀伊風土記の丘 瀬谷 今日子 氏

13時40分 報告Ⅱ 「中世熊野の港と倉庫群 ―新宮市 新宮城下町遺跡の発掘調査―」

新宮市教育委員会 小林 高太 氏

14時15分 休憩10分

14時25分 報告Ⅲ 「近世の武家屋敷と古代の掘立柱建物群

―和歌山市 和歌山城三の丸の発掘調査―」

（公財）大阪府文化財センター 福佐 美智子 氏

15時00分 報告Ⅳ 「和歌山城北側地域における土地利用の変遷

―和歌山市 和歌山城三の丸の発掘調査―」

（公財）和歌山県文化財センター 川崎 雅史

15時35分 休憩10分

15時45分 報告Ⅴ 「熊野水軍の本拠・居館の様相

―西牟婁郡白浜町 安宅本城跡の発掘調査―」

白浜町教育委員会 佐藤 純一 氏

16時20分 報告Ⅵ 「奉公衆山本氏の幻の館

―西牟婁郡上富田町 坂本付城跡の発掘調査―」

和歌山県教育委員会 田中 元浩 氏

上富田町教育委員会 小倉 英樹 氏

16時55分 閉会挨拶

■開催場所：きのくに志学館（和歌山県立図書館）2階 講義・研修室

和歌山市西高松一丁目7番38号

■主催：公益財団法人和歌山県文化財センター

■後援：和歌山県教育委員会、新宮市教育委員会、白浜町教育委員会、上富田町教育委員会
公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団

※この報告会は、平成31年度国宝重要文化財等保存・活用事業費（和歌山県内地域の特色ある埋蔵文化財活用事業）の補助金を受けて実施しています。

報告資料集目次

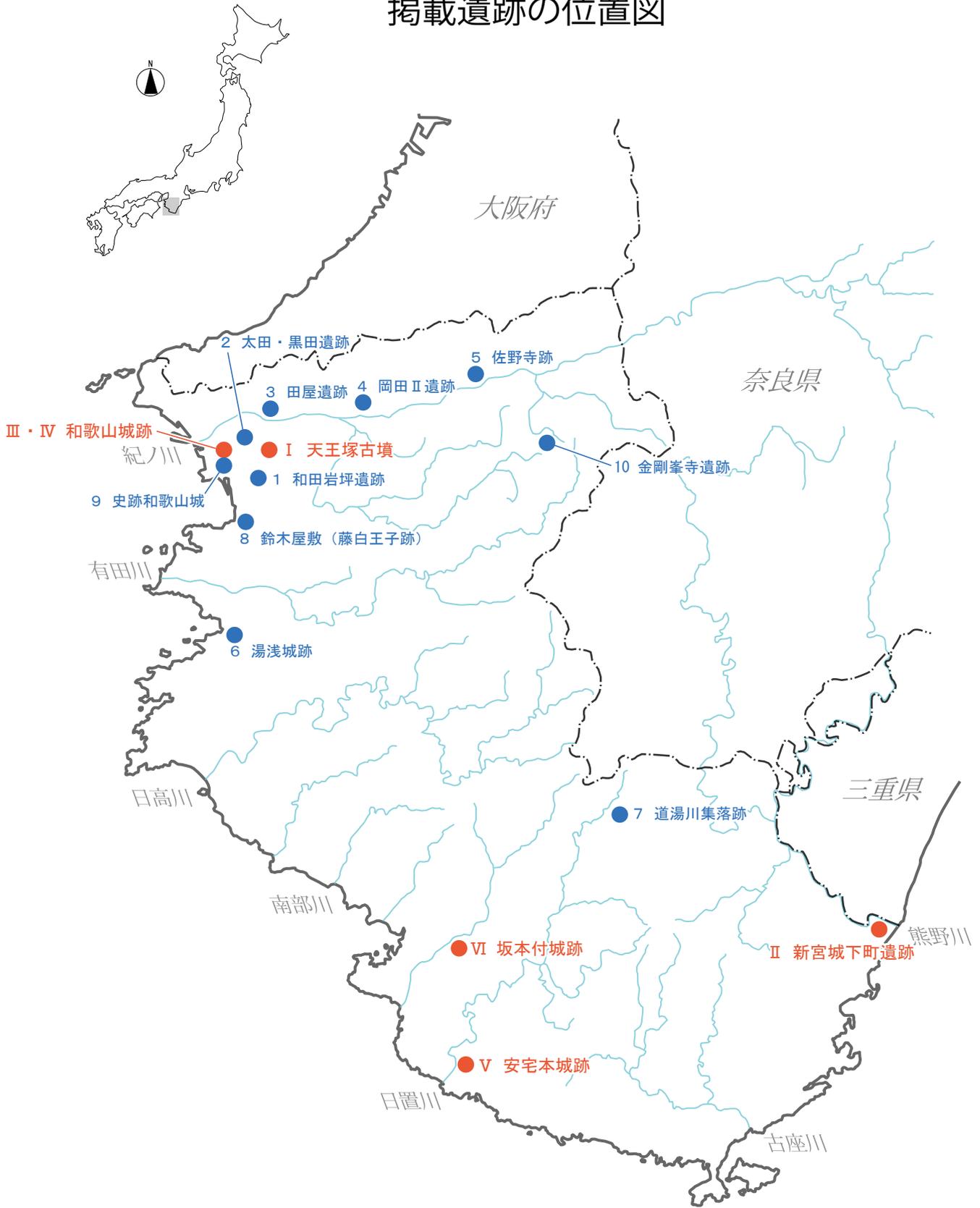
■ 巻頭図版	
■ 開催にあたって	
■ 開催日程	
■ 掲載遺跡の位置図	1
■ 報告	
I 「県内最大級の首長墓を掘る・54年ぶりに開かれた横穴式石室 ―和歌山市 天王塚古墳の発掘調査―」	2
瀬谷 今日子：和歌山県立紀伊風土記の丘	
II 「中世熊野の港と倉庫群 ―新宮市 新宮城下町遺跡の発掘調査―」	8
小林 高太：新宮市教育委員会	
III 「近世の武家屋敷と古代の掘立柱建物群 ―和歌山市 和歌山城三の丸の発掘調査―」	14
福佐 美智子：(公財)大阪府文化財センター	
IV 「和歌山城北側地域における土地利用の変遷 ―和歌山市 和歌山城三の丸の発掘調査―」	20
川崎 雅史：(公財)和歌山県文化財センター	
V 「熊野水軍の本拠・居館の様相 ―西牟婁郡白浜町 安宅本城跡の発掘調査―」	26
佐藤 純一：白浜町教育委員会	
VI 「奉公衆山本氏の幻の館 ―西牟婁郡上富田町 坂本付城跡の発掘調査―」	32
田中 元浩：和歌山県教育委員会	
小倉 英樹：上富田町教育委員会	
■ 誌上報告	
1 「弥生時代前期の生活域 ―和歌山市 和田岩坪遺跡の発掘調査―」	40
土井 孝之：(公財)和歌山県文化財センター	
2 「弥生時代集落の南端の様子 ―和歌山市 太田・黒田遺跡の第90次調査―」	42
菊井 佳弥：(公財)和歌山市文化スポーツ振興財団	
3 「紀ノ川北岸の古代の用水路 ―和歌山市 田屋遺跡の発掘調査―」	44
森田 真由香：(公財)和歌山県文化財センター	
4 「奈良時代の集落跡 ―紀の川市 岡田Ⅱ遺跡の発掘調査―」	46
森原 聖：紀の川市教育委員会	
5 「古代の寺院と佐波理鏡蓋 ―伊都郡かつらぎ町 佐野寺跡の整備―」	48
和田 大作：かつらぎ町教育委員会	
6 「明らかとなった湯浅党の本拠 ―有田郡湯浅町 湯浅城跡の発掘調査―」	50
山本 隆重：湯浅町教育委員会	
仲辻 慧大：和歌山県教育委員会	

7 「湯川氏一族発祥の地 — 田辺市 道湯川集落跡の発掘調査 —」	52
金澤 舞：和歌山県立紀伊風土記の丘	
8 「鈴木姓のふるさと — 海南市 鈴木屋敷(藤白王子跡)の整備に伴う発掘調査 —」	54
矢倉 嘉人：海南市教育委員会	
9 「和歌山城西の丸 能舞台の発掘 — 和歌山市 史跡和歌山城の第 40 次発掘調査 —」	56
大木 要：和歌山市	
10 「高野山における納骨信仰霊場の範囲について — 伊都郡高野町 金剛峯寺遺跡の分布調査 —」	58
鳥羽 正剛：高野山霊宝館	

— 記 —

- 1 本書は、平成 31 年度国宝重要文化財等保存・活用事業費（和歌山県内地域の特色ある埋蔵文化財活用事業）の補助金を受けて、公益財団法人和歌山県文化財センターが実施した『地宝のひびき—和歌山県内文化財調査報告会—』の報告資料集である。
- 2 本書掲載資料の中には、正式な報告書が刊行されていないものが含まれている。そのため、今後、各資料の位置付けが変更される可能性がある。
- 3 本報告会を開催するにあたり、県内各自治体及び機関の文化財関係部局・担当課から多大なるご協力を得た。記して謝意を表す次第である。
- 4 本書の編集は、土井孝之（公益財団法人和歌山県文化財センター）が担当した。

掲載遺跡の位置図



● 報告関係遺跡

● 誌上報告関係遺跡

※ローマ数字・算用数字は、目次の番号と一致します。

県内最大級の首長墓を掘る・54年ぶりに開かれた横穴式石室

— 和歌山市 天王塚古墳の発掘調査 —

和歌山県立紀伊風土記の丘 瀬谷今日子

1. はじめに

岩橋千塚古墳群は、紀ノ川河口部、和歌山平野の南岸に位置する岩橋丘陵周辺に、東西約3km、南北約2.5kmの範囲に広がる4世紀末から7世紀後半にかけて築造された古墳群で、その総数は約900基にも及ぶ全国最大級の古墳群である。

天王塚古墳は、岩橋山塊最高所標高155mの山頂に位置する岩橋千塚古墳群内の首長墓である。平成27年度の和歌山県教育委員会による発掘調査後、平成28年10月に特別史跡岩橋千塚古墳群に追加指定された。和歌山県立紀伊風土記の丘では、天王塚古墳の今後の整備・公開に必要な基礎情報を収集することを目的に、平成29・30年度に墳丘並びに横穴式石室の発掘調査を実施した。

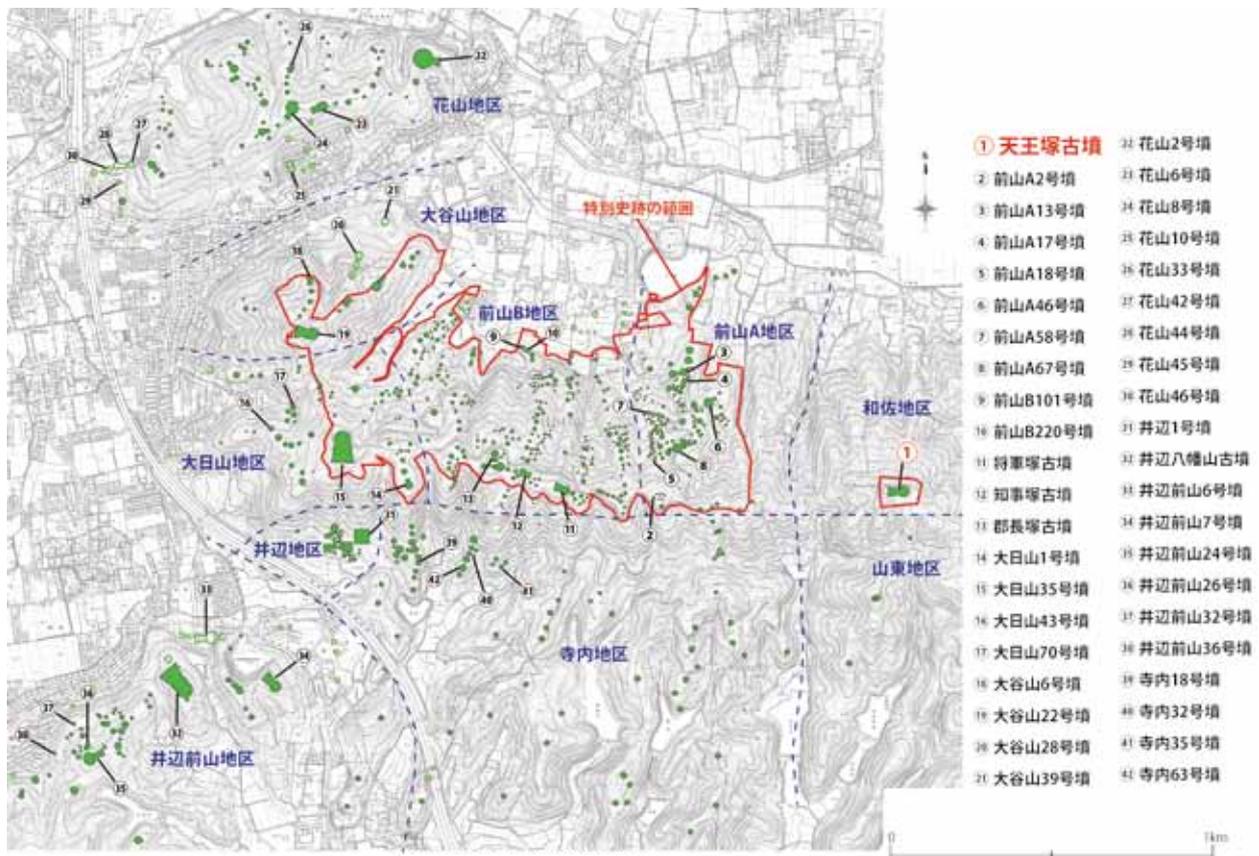


図1 岩橋千塚古墳群分布図と天王塚古墳の位置

2. これまでの調査

天王塚古墳の調査は、古くは明治40年（1907）に東京帝国大学人類学教室の大野雲外（延太郎）により行われた。明治41年（1908）にはN.G.マンローにより『PREHISTORIC JAPAN』に横穴式石室の図面が掲載され、石棚と石梁を持つ特異な横穴式石室は広く海外にまで知られることとなった。

その後、昭和 39 年（1964）に和歌山市教育委員会の委嘱を受けた関西大学文学部考古学研究室により、墳丘及び横穴式石室の発掘調査が実施され、国内で 2 番目の高さを誇る玄室高 5.9m の横穴式石室の図面及び写真記録が作成された（末永雅雄編 1967）。調査後は、保全のために石室入口は完全に埋め戻された。

平成 27 年度には、和歌山県教育委員会による墳丘の発掘調査において、墳丘長 88m の和歌山県内最大規模の前方後円墳であることが判明した（和歌山県教育委員会 2016）。

築造年代は、これまでの調査における出土遺物や横穴式石室の編年観から、古墳時代後期中葉（6 世紀中葉）とされる。

3. 調査成果

墳丘

平成 29 年度の調査では、後円部トレンチ（5tr）で墳丘テラス、後円部（5・6・10tr）と前方部のトレンチ（7tr）で墳丘裾を確認した。墳丘の形状は、平成 27 年度の調査成果と合わせて、全長 88m、後円部の高さ 10.1m、直径約 44～48m の前方後円墳に復元でき、後円部及び前方部ともに 2 段築成であった。墳丘は、1 段目テラスまでは地山岩盤を削り整形し、2 段目以上を盛土により構築していた。また、後円部南側（10tr）と前方部北側（7tr）では、岩盤が検出されず、この部分では墳丘は裾部から盛土により構築されていた。これらの箇所では古墳築造時の基盤となる地層から、多量の弥生土器が出土しており、弥生時代後期にこの場所が利用されていたことが判明した。

なお、墳丘には、葺石、造出、基壇、周濠は確認されず、埴輪片も出土していない。天王塚古墳には埴輪が伴わず、埴輪列や多様な形象埴輪を伴う大日山 35 号墳などの 6 世紀前半の首長墓と大きく様相が異なる。

横穴式石室

後円部に設置された南側に開口部を持つ横穴式石室は、昭和 39 年（1964）の発掘調査後、保全のために入口を土砂で埋め戻したため、石室内部の状況は長らく不明であった。平成 29 年度の調査では、石室開口部周辺

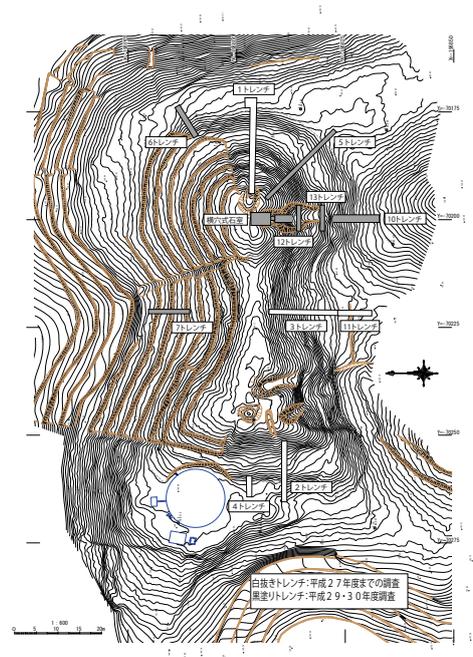
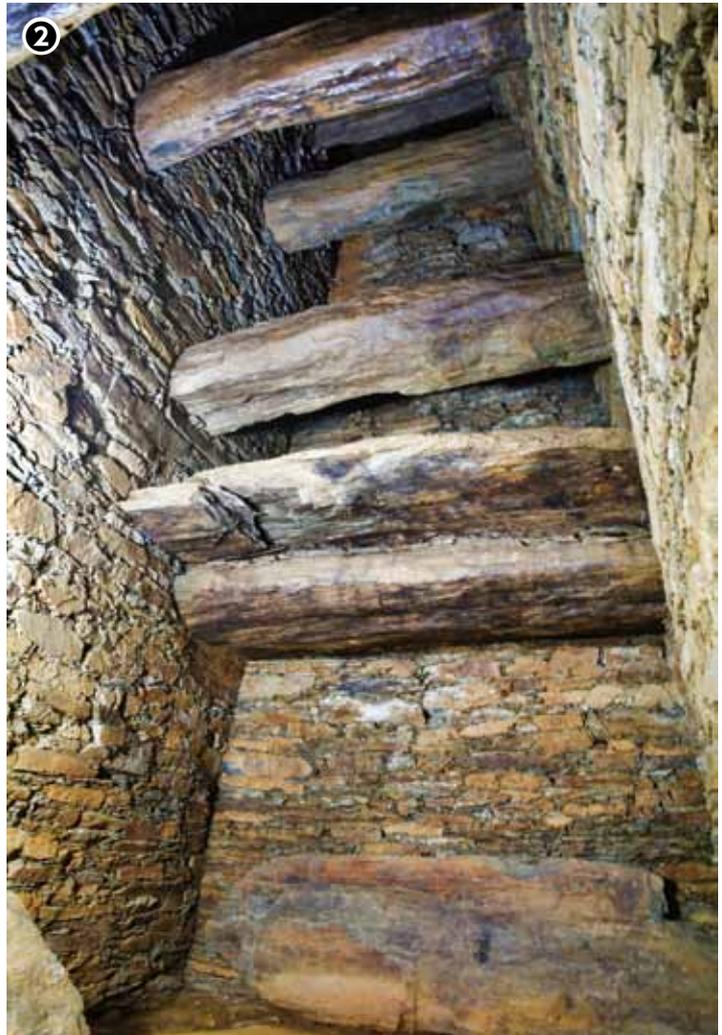
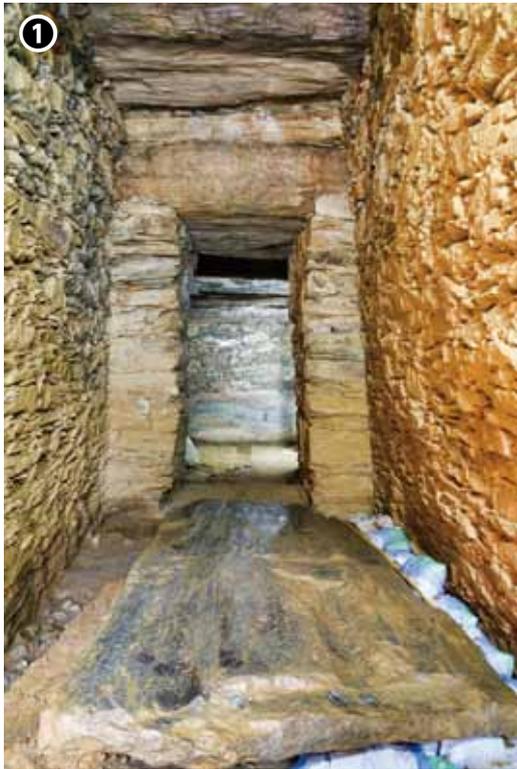


図 2 天王塚古墳調査区配置図



写真 1 後円部トレンチ（5tr）全景

天王塚古墳横穴式石室 各部の名称



①羨道部 (南から) ②玄室奥壁 (南から)
③玄室床面 (北から)

写真 2 横穴式石室調査写真

に約 2m 堆積した埋め戻し土と流土を取り除き、54 年ぶりに横穴式石室内部の状況を確認した。石室内部には、羨道部の一部に埋め戻し土が流入していたが、大きな損傷等は見られなかった。

石室は、結晶片岩の割石積みで、玄室主軸長 4.32m、玄室幅 2.98m、玄室高 5.9 m、玄室前道幅 0.86m、玄室前道長 1.03m、羨道長 4.83m、羨道幅 1.55m を測る岩橋型横穴式石室である。

玄室高 5.9m は、熊本県大野窟古墳の横穴式石室（高さ 6.48m）に続く国内 2 番目の高さである。玄室の奥壁及び側壁には岩橋千塚古墳群で最大の石棚 2 枚と垂直石梁 8 本が架構される。玄門と羨門は扉石（板石）により閉塞される。玄室床面には、板石 8 枚が散乱していた。板石の一部には、U 字状のくり込み加工が施されており、組み合わせで遺骸を置く施設として使用されたと見られる。

玄室床面は、玉石を含む攪乱土の下に岩盤を検出した。排水溝は、玄室両側壁沿いと中央に岩盤を掘り込み設置され、玄室南側から羨道部の下を通って墳丘の外に延びている。

清掃後、3D レーザー測量により、石室石積みの詳細な記録を作成した。

横穴式石室前庭部

平成 30 年度の調査では、横穴式石室前庭部の構造把握を目的に、昭和 39 年度の発掘調査時のトレンチの床及び壁面の清掃を行った。

精査の結果、横穴式石室羨門上部北壁の墳丘盛土は、厚さ 15～20cm の単位で暗灰黄色シルト層と黄褐色粘質土が互層に積み上げられていた。この盛土は、羨門上部の東西壁面では、石室羨門外側の石積みのある範囲で確認することができ、それより南の前庭部側の盛土とは、盛土の単位や傾斜方向が異なっていた。両者の盛土の接点にあたる箇所は攪乱により不明瞭であるが、石室裏込め部分と前庭部で墳丘盛土の積み方が異なることを確認することができた。

前庭部東壁の精査では、地山岩盤の上に厚さ 4～10cm の単位で水平に積まれた断面縞状の盛土が、石積際から前庭部トレンチ南端まで施されている状況を確認した。前庭部中央に残した畦の土層の観察では、この縞状の盛土を切る 2 度の掘込みの痕跡を確認した。さらにこの掘込み内部の土の堆積状況から、墳丘盛土を掘込んだ後、人為的に埋め戻されたことが想定でき、掘り込みが盗掘によるものではなく、埋葬に伴う墓道の掘削とその後の埋め戻しの痕跡と判断した。また、前庭部西壁や南壁の土層断面にも、対応する掘込みの痕跡が確認できた。一方、前庭部トレンチの南側で第 1 テラス付近に設けたトレンチ (13tr) では、墳丘盛土に人為的な掘込み痕跡が確認できないことから、墓道の掘削が墳丘裾からではなく第 1 テラス付近からであったことが想定される。

天王塚古墳は 6 世紀中葉の首長墓で、墳丘及び横穴式石室は岩橋千塚古墳群中最大規模を誇る。天王塚古墳の築造をピークに、紀ノ川流域から有田川下流域において岩橋型横穴式石室の分布が広がるなど、その影響は岩橋千塚古墳群のみならず周辺各地にも及ぶものであった。従って今回の発掘調査によって、天王塚古墳における前庭部での盛土の様相や墓道の掘削状況が明らかになったことは、岩橋千塚古墳群のみならず周辺の古墳における石室の構築過程や追葬行為を考える上でも重要な成果となるだろう。

石室出土遺物

横穴式石室内からは、昭和 39 年の調査の際に、羨道部から土師器壺・直弧文が描かれた漆膜、玄室内の石棚上からガラス小玉 20 点・金銅製飾り金具・鉄鏃・小札、玄室と羨道から須恵器（器台・壺・坏）、玉類（銀製空玉・ガラス小玉・瑪瑙製切子玉・琥珀小玉・滑石製白玉）、金銅製金



A
↑

全景



A: 羨門上部 北壁・西壁 盛土



B: 前庭部 東壁



C: 前庭部 西壁



D: 前庭部 中央畦南壁



E: 前庭部 南壁

写真3 前庭部調査写真

具が出土している。

今回の調査では、玄室内に堆積している土を 50cm 四方グリッドで採集し、床面に敷設されていた玉石や大きな遺物を選別した後に持ち帰った。土壌の採集過程で、須恵器・鉄鏃・瑪瑙製切り玉が出土したが、いずれも攪乱状態で原位置を保持するものではなかった。

持ち帰った土を 5mm と 1mm メッシュの篩いにかけての結果、須恵器(装飾付器台・坏)・鉄鏃・小札・玉類・金銅製品など、これまで確認されていた器種に加え、金銅装胡録金具や岩橋千塚古墳群で初の出土例となるガラス玉を埋め込んだ金銅製冠（又は飾履）の破片も多量に確認することができた。また、玉類に関して

も、ガラス玉を中心にあらたに数千点に及ぶ出土を確認することができた。石室内は古くから開口していたことから、盗掘が行われている可能性が高いが、そうした中でも質・量ともに豊富な副葬品が出土したことは、天王塚古墳の被葬者像を考える上で、重要な手がかりとなった。



写真4 横穴式石室出土遺物の一例

■ 4. おわりに

「天王塚の調査は、今、どうなっている?」「調査成果は?」「整備はどこまで進んでいる?」

平成 29 年 7 月の発掘調査開始以来、紀伊風土記の丘には、天王塚古墳に関して実に多くの方々から質問や問い合わせが寄せられている。平成 30 年 3 月に開催した 54 年ぶりの石室公開には 600 名を越える参加者を得るなど、今回の発掘調査を通じて、地域の方々天王塚古墳に寄せる関心の高さ、想いの強さ、期待の大きさをあらためて知ることとなった。この古墳が 1500 年もの間、地域の中で守られ、受け継がれてきた意義をあらためて考え、そして将来にわたり地域の宝として輝きつづけるよう、今回の調査成果を生かして、適切な保存と整備を着実に進めていきたい。

【参考文献】

末永雅雄編 1967 『岩橋千塚』

和歌山県教育委員会 2016 『大谷山 22 号墳、天王塚古墳―特別史跡岩橋千塚古墳群追加指定に伴う発掘調査報告書―』

中世熊野の港と倉庫群

— 新宮市 新宮城下町遺跡の発掘調査 —

新宮市教育委員会 小林高太

1. はじめに

新宮市では文化複合施設の建設計画を進めている。建設予定地では平成27年度に実施した試掘調査で遺跡が確認され、埋蔵文化財包蔵地「新宮城下町遺跡」として新規認定された。その後、数次にわたり発掘調査を実施している。調査箇所は、主に旧丹鶴小学校の敷地で、東側に国史跡新宮城跡がある丹鶴山がせまり、北側に熊野川が流れ、熊野川の河岸段丘上に立地する。本発表では、平成30年3月～平成31年3月まで実施した第2次調査の成果を中心に報告を行う。なお、一連の調査は、(公財)和歌山県文化財センターに委託して行った。

2. 調査地周辺の中世

熊野川は河口付近に大きな沖積平野を形成せず、山間部を抜けてすぐに海に注ぐ。河口付近のわずかな平野に新宮市街地が形成されている。平安時代後期から鎌倉時代にかけて、熊野三山への参詣は上皇・貴族により隆盛を極める。丹鶴山一帯は、熊野三山の一つである熊野速玉大社から阿須賀神社(阿須賀王子跡)への参詣道沿いに位置し、古くからの要衝の地であったと想定される。近世の編纂書である『熊野年代記』に拠れば、付近には、平安時代頃には熊野別当が別邸を築き、平安時代末頃には別当屋敷が移されたともある。その頃、源頼朝の叔母にあたる「丹鶴姫(鳥居禅尼)」が東仙寺を建てたとの記録も残り、同じ頃に丹鶴山南麓には香林寺(現在の宗応寺)があったとされている。また、丹鶴山周辺からは、中世墓地の遺物として東海地方の陶器類が多



図1 新宮城下町遺跡周辺の遺跡分布図

く出土しており、場所を移した現在の東仙寺や宗応寺に伝わる五輪塔や宝篋印塔などの供養塔も、これらの墓地に係るものと思われる。

鎌倉時代を過ぎると、熊野別当の勢力が衰退するが、熊野三山の上位の役僧である宮崎氏が東仙寺を修理し、新宮城の二ノ丸である現在の正明保育園付近を居館としたとある。戦国時代になると堀内氏の力が台頭し、戦国時代末には丹鶴山に城を築き、麓に城下町形成を行ったとの説も伝わる。

関ヶ原の戦いの後、紀州藩主となった浅野幸長の重臣である浅野忠吉が慶長6年（1601）に丹鶴山で新宮城の築城を開始し、併せて城下町整備を行った。その後、築城は紀州徳川家の付家老である水野氏に引き継がれ、寛永10年（1633）頃に完成したとされる。

■ 3. 第2次調査の成果

(1) 概要

第2次調査では、大別すると3つの遺構面が確認されている。第1遺構面は江戸時代、第2遺構面は弥生時代末と平安時代末～室町時代、第3遺構面は縄文時代中期である。

第1遺構面の江戸時代の遺構としては、城下町の道路と武家屋敷地を区画する石垣を確認している。道路は幅約2.6mで、江戸時代末頃の絵図に拠れば「竹矢町通」にあたる。石垣は江戸時代初期に築造されたと想定されるものも確認されている。第2遺構面では、中世の港に係する地下式倉庫や通路などが確認されている。また、弥生時代末頃の竪穴建物が確認されている。第3遺構面では、わずかではあるが縄文時代の遺構・遺物を確認している。調査区北東部のみの検出であり、縄文時代の遺跡は、第2次調査区より東側に展開していると想定される。

以下では、本遺跡の中でも特に注目される港関連の遺構が確認された第2遺構面（中世）の調査状況について見ていく。

(2) 第2遺構面（平安時代末～室町時代）の遺構

平安時代末から室町時代にかけての多数の遺構が重複して存在する。検出した遺構は、掘立柱建物、地下式倉庫、大型土坑、通路、石垣などがある。

掘立柱建物は、調査区南側を中心に径約0.3mの柱穴が無数に検出されており、相当数の建物が高い頻度で建て替えられていたことが窺える。2間×3間の規模の建物を4棟は確認復元できた。柱穴の底部には据石を置くものも多い。

地下式倉庫は、重複、造替えを含めて24基確認している。いずれも地面を1m程掘りくぼめた2m×3m前後の平面規模を有する。大別すると素掘りもしくは壁土を貼り付けた「方形竪穴建物」と石積みで壁面を構築した「石積み地下式建物」の2つのタイプが見られる。いずれも類例から倉庫跡と想定される。

方形竪穴建物は、上屋建物の構造により、さらに分類できる。1つ目が土台建物で、素掘りの方形竪穴の底面に石を並べるもしくは小礫を敷き詰めることにより、建物の根太を受ける。素掘り小礫敷きのものの一つで火災により焼失したことで炭化材が残存しており、上屋建物の構造の一端が窺える。四隅に上屋を受ける柱があり、床面は厚さ約5cmの小礫を敷き詰め、0.6m間隔で根太を渡し、それに直交する形で床板が貼られている。

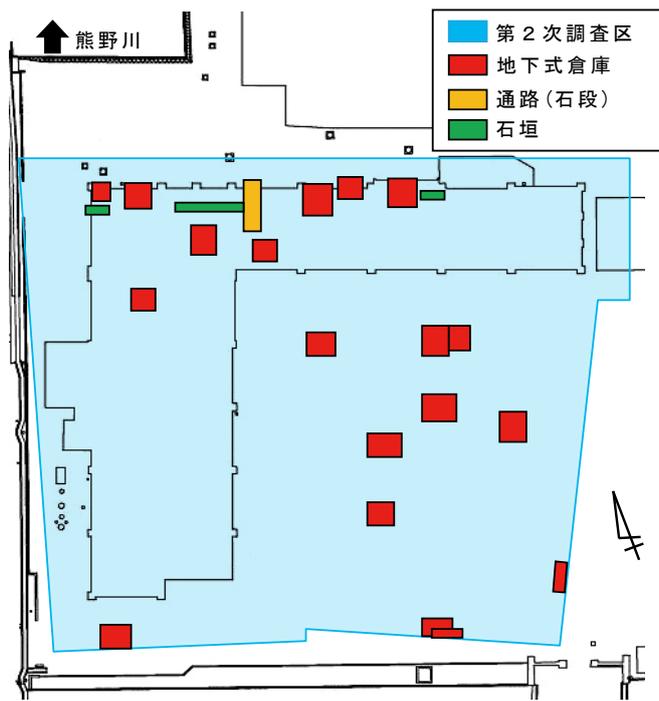


図2 第2次調査の主な遺構位置図(中世)

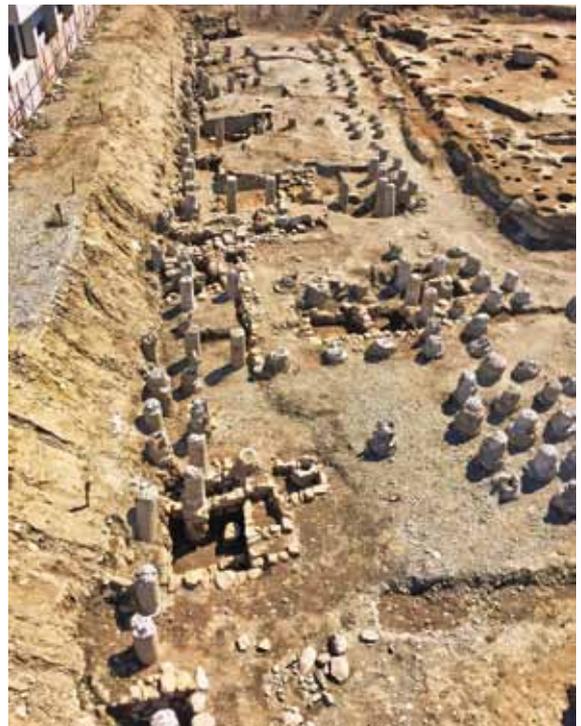


写真1 地下式倉庫群(西から)



写真2 調査区南側(東北東から)



写真3 通路(石段)(北から)



写真4 地下式倉庫(方形竪穴)(北から)



写真5 地下式倉庫(石積み)(北から)

2つ目は、掘立柱建物で床面に柱穴が確認されている。これまでの調査でも複数確認されており、方形竪穴の四隅に柱穴をもつものや四辺に柱穴が並ぶものが見られる。

石積み地下式建物は、本体部と一段浅い突出部からなり、壁を石積みしたものである。本体部分は突出部に比べて、一段低い。底面や石積み壁面などには、黄橙色の粘土が貼られている。突出部は、荷物昇降用のステップと考えられる。造り替えが行われたものも見られる。

大型土坑は、直径約 1.2 m、深さ 2 m 以上を測るもので、第 2 次調査では 12 基検出されている。出土遺物からは、鎌倉時代前期に帰属する可能性が高い。これまでの調査でも複数確認されているが、その性格については不明である。

通路は、調査区北端部で確認されており、石階段を伴い、調査地北側を流れる熊野川に向けて下っている。通路幅は約 1.2 m で、小規模なものである。通路両脇は石積みされている。

石垣は、調査区北端部で確認されており、通路と直交している。敷地境界と考えられる。

調査区南側から中央部では、地形は平坦な微高地であるが、調査区北側では熊野川へと急激に下っている。室町時代中頃に造成し川側への敷地の拡張が行われたと考えられ、石垣は造成に伴い設置されたものと思われる。造成された敷地には、川に面する形で東西方向に地下式倉庫が並ぶ。建ち並ぶ倉庫の間に小規模な通路が設けられた構造が窺える。

(3) 港の倉庫群と出土遺物

第 2 次調査で確認された遺構の中で特に注目されるものは地下式倉庫である。多様な構造のものが複数確認されており、それぞれの倉庫の構造を窺うことができる。また、群として確認されたことで、屋敷に伴う倉庫ではなく、港の倉庫群という性格が鮮明となった。特に調査区北端部では川に面する形で東西方向に地下式倉庫が並んでおり、港に建ち並ぶ倉庫群の風景が想像できる。

出土遺物としては、土師器、常滑焼、備前焼、中国製陶磁器などが出土している。土師器や陶磁器（常滑、瀬戸など）は、伊勢湾沿岸、東海地方のものが中心に出土している。一方、数では劣るが備前・東播などの陶磁器や播磨・阿波系の土師質鍋などの瀬戸内地方、西日本のものも出土しており、東西との幅広い交易を窺うことができる。また、中国製の白磁、青磁などの輸入陶磁器も多く出土しており、港の経営者は有力層であったと想定される。

4. まとめ

平成 27 年以降に実施した発掘調査成果から遺跡全体の遺構の配置を見ると、南側の微高地に掘立柱建物、地下式倉庫、大型土坑があり、川に近い北側の斜面地には石垣で区画された敷地が段状に造成されている。川に近い北側敷地では、地下式倉庫や鍛冶遺構が確認されており、その間に熊野川へと下る通路（石段）が設けられている。

残念ながらこれまでの調査では、港のメイン施設である船着場や護岸は確認されていないが、これらの確認された遺構や遺物から本遺跡の性格は港である可能性が高い。地下式倉庫が物資を蓄える倉庫、掘立柱建物は湊の管理施設などで、鍛冶や鑄造を行う工房も備える。船着場は、通路を下った先の川原周辺に存在したと想定される。これらの遺構が整然と配置されており、計画性をもって造られた港の構造が明らかとなってきた。



写真6 掘立柱建物群 (南から)



写真7 地下式倉庫・石積み (北東から)



写真8 地下式倉庫 (方形竪穴 [土台]) (北から)



写真9 地下式倉庫 (方形竪穴 [掘立柱]) (南から)



写真10 大型土坑列 (北から)



写真11 鍛冶遺構 (西から)



写真12 通路と石垣 (北西から)



写真13 通路と石段 (北から)

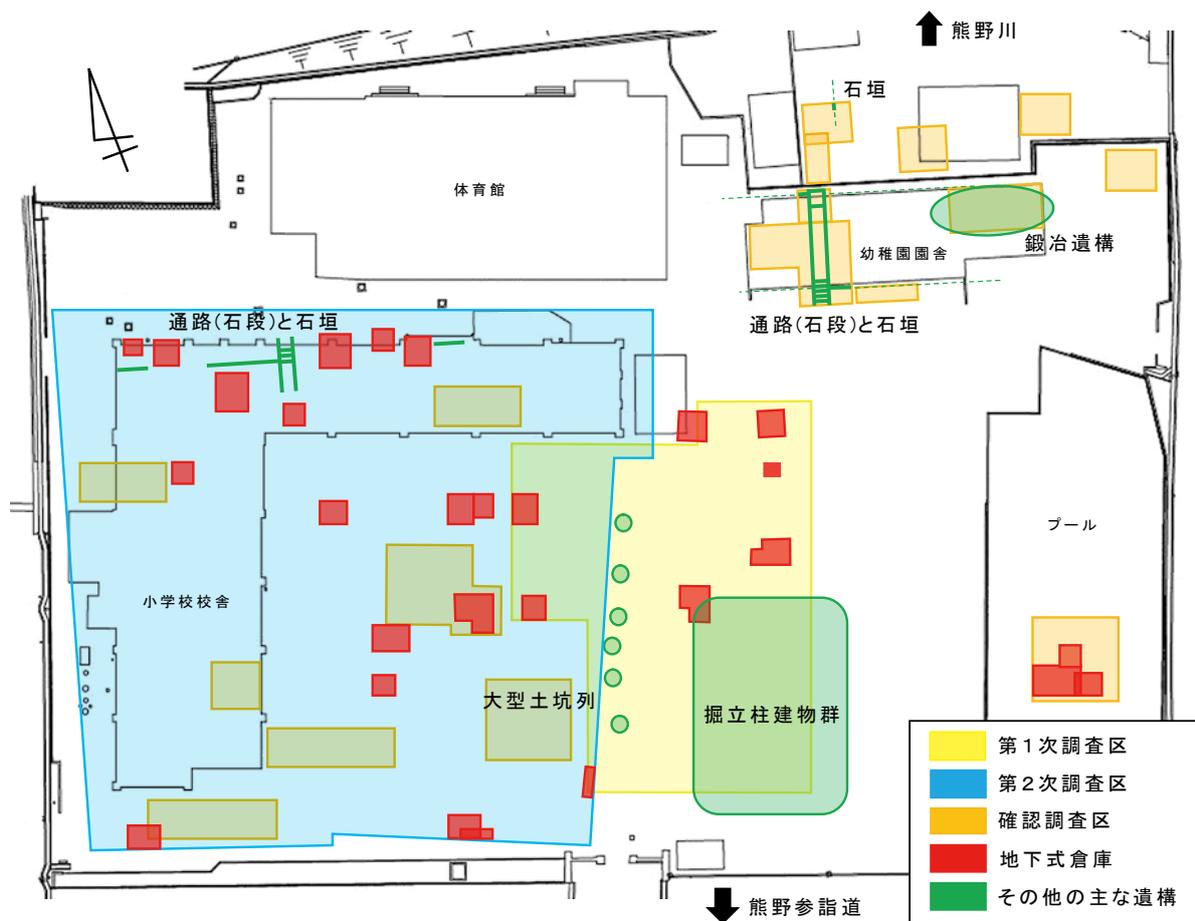


図3 第2遺構面（平安時代末～室町時代）の主な遺構分布図（遺跡全体）

また、立地をみると、遺跡は熊野川河口から約1.5km上流に位置し、東側の丹鶴山が川へと張り出し、波、風の影響を受けにくい場所であり、港として最適の立地である。本遺跡の周辺や対岸も含め、熊野川河口部には複数の港（船着場）が存在し、大規模な河口港の存在も想定され、本遺跡は、立地や遺構、遺物の内容から、その中心的な港であった可能性がある。東西日本の間に張り出した紀伊半島の先端部に位置する港であり、太平洋沿岸における海上交易の拠点であったことも窺える。

中世新宮の港について、文献記録では、鎌倉時代後期の「熊野山日供米配分注文」（永仁3年（1296））に「新宮津」の記載が見られる。この史料には熊野本宮大社の荘園であった上総国畔蒜荘から新宮津への年貢輸送についての記載がある。新宮城下町遺跡の約0.5km上流には熊野速玉大社があり、さらに上流へと遡った熊野川中流域には熊野本宮大社がある。いずれの大社も全国各地に荘園を保持しており、各地の荘園から物資が運ばれたと考えられる。「新宮津」は、その物資の集積拠点であった可能性が高く、熊野信仰との関係も深い。本遺跡からは、青白磁合子や鏡、石造物などの宗教色が読み取れる遺物も出土しており、宗教勢力がその経営に深く関わった可能性は高い。中世の海上交易をはじめとした物流システムには、宗教勢力が介在することが指摘されており、熊野という一大宗教勢力を背景とした中世の太平洋沿岸の交易・交通の姿が浮かび上がる。

今後、出土遺物などの整理とともに多角的な調査、研究を進め、熊野川河口に存在した港の詳細について解明していきたい。

近世の武家屋敷と古代の掘立柱建物群

— 和歌山市 和歌山城三の丸の発掘調査 —

公益財団法人大阪府文化財センター 福佐美智子

1. はじめに

和歌山城三の丸は(図1)、本丸・二の丸を防備するための外郭にあたり、周囲は土塁と堀をめぐらされていた。内部には藩の役所や家臣の屋敷が建ち並び、特に紀州徳川家とつながりの強い家臣たちに与えられた武家地であったと考えられている。

今回の調査地は和歌山古屋敷絵図(万治元～寛文元(1658～1661)年)によると久野・松平・大藪・藺田・海野家の屋敷地となっているが、和歌山城下屋敷大絵図(宝永6～正徳4(1709～1714)年)では、渡辺・松平・津田・田宮・海野家の屋敷地となっている。このことから17世紀中頃から18世紀初頭の間屋敷替えが行われた可能性が高いと考えられる。その後の安政2(1855)年の「和歌山城下町絵図」でも渡辺・松平・津田・田宮・海野家とあるため、18世紀初頭から19世紀中頃までは変わらず4家が居住していたと見られる(図2)。またそれぞれの表門は渡辺・松平・海野家は南側、津田・田宮家は北側に設けられていた。

発掘調査は、1・2区・4～7区の計6ヶ所の調査区を設定し、平成29年6月から平成31年2月まで行った。調査面積は約5,050㎡である。今回の報告では1・2区の成果について述べたい。

2. 調査の成果

1・2区の調査は、古墳時代前期～近代まで10面の遺構面を検出した。そのうち第2～4面が和歌山城三の丸に該当する。第2・3面では4軒の屋敷地(屋敷地A～D)を検出した。屋敷

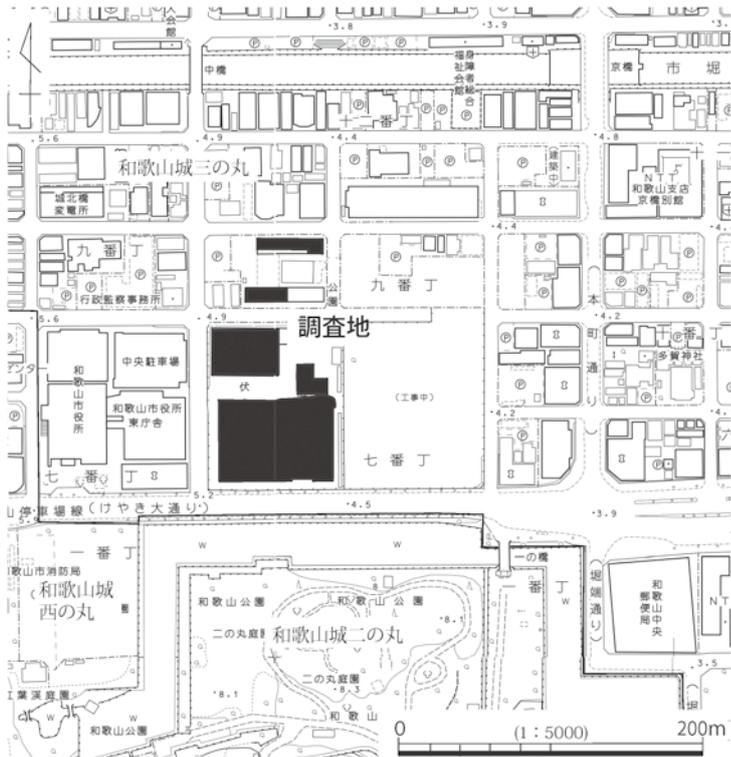


図1 調査地位置図

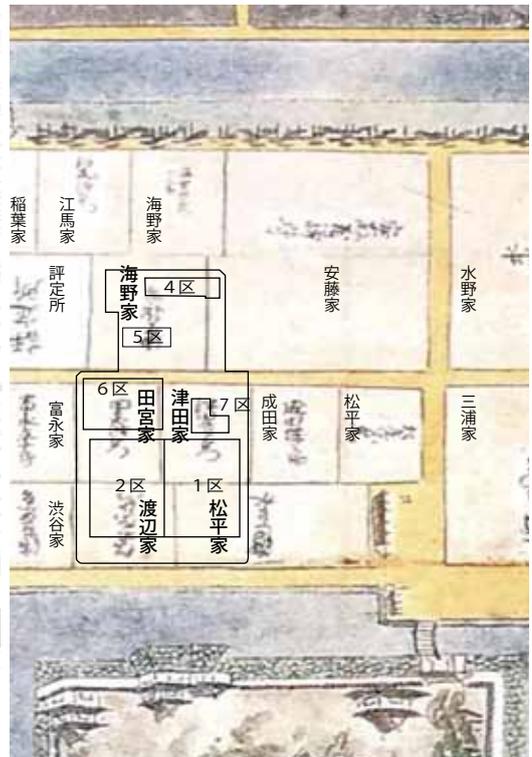


図2 和歌山城下町絵図と調査区位置図

地 A～Dからは礎石建物・井戸・池・溝・土坑や、土塀基礎の石列などの屋敷地境に関連する遺構を検出した（写真2）。

1区南側の屋敷地Aは第3・4面で礎石列や礎石を検出しており、礎石建物があったものと考えられる。第3面では建物の他に竈・井戸・石組柵・溝・土坑を検出した。南東隅から921石組柵を検出した（写真3）。石組柵の規模は長さ南北2.5m・東西4.5m、深さ0.8mである。南西隅は外に張り出して、一段低くなっている。石材は緑色片岩の板石を用いていた。

特筆すべき遺構として、地鎮のためと見られる石球を埋納した土坑を東・西・南・北の4ヶ所で検出した（写真4）。これらの土坑を線で結ぶと菱形を描く。石球の大きさは直径約17cmあり、その周囲を炭化材で充填して埋められていた。石球には法華経の一部とみられる墨書と、それに沿って朱書きの線が引かれていた。線は八分割するように描かれ、更に直交する線が一条めぐる。そのため上から見ると八分割、横から見ると四分割になる。

1区北側の屋敷地Bは、敷地裏手の庭部分にあたり池・井戸・廃棄土坑群等を検出した。池は石組池（748池）（写真5）と漆喰池（821池）の2基を検出した。748池の規模は、南北約5.5m・東西約2m、深さ約1mである。長楕円形で南側で細くくびれ、南端に緑色片岩の板石が階段状に組まれた給水口がみられる。石材は大部分が緑色片岩であるが、基底部のみ砂岩が用いられる。砂岩の下は、池底部との間に空間があり元々、胴木が敷かれていた可能性が考えられる。

821池は漆喰の底部に平たい石が埋められている。漆喰が二重になっている部分もあり、造り替えがあった可能性がある。池の周囲には石敷きや瓦列などを検出した。また、821池周辺の攪乱からは手水鉢が出土している。池の南西に位置する土坑の底部付近には粘質土がみられ、手水鉢の大きさにほぼ一致している。手水鉢は本来この土坑に据えられていた可能性も考えられる。



写真1 調査地全景（北から）

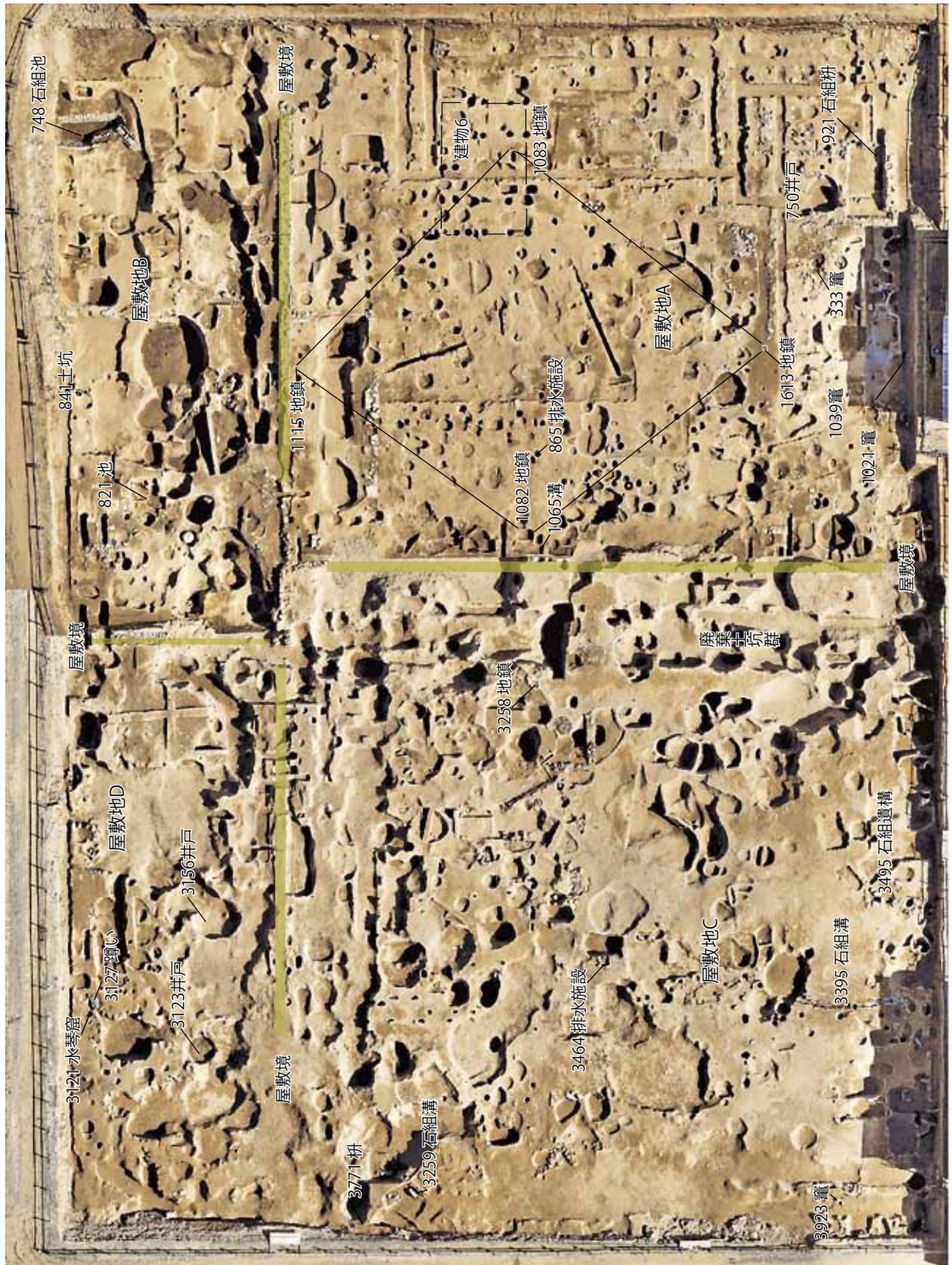


写真2 1・2区 近世(第3面)遺構全景



写真3 第3面 921 石組柵 (北東から)



写真4 第3面 1083 地鎮 (南から)

そして調査区北端中央で 841 土坑を検出した (写真6)。土坑内には甕が据えられ、甕内には 30 枚以上の土師器皿が納められていた。加えて土坑底面には甕の底部に沿うように土師器皿が置かれており、地鎮に伴う遺構と考えられる。

2区南側に位置する屋敷地Cは、第2面で礎石建物・竈・井戸・池、第3面で竈・井戸・排水施設・石組溝等を検出した。第2面で検出した礎石建物は、調査区の南西側に位置し、その周辺はシルトの整地土がみられ、第3面でも同様の箇所ですべて柱穴を多く検出している。南西端からは第2・3面共に竈が検出されていることから、屋敷地の南西側に母屋が位置していたと考えられる。

その建物の東側から 3395 石組溝を検出した。溝は曲線を描きながら北から南に延びており、南端は礫で充填された土坑に繋がる。北西端では 3259 石組溝とこれに組み合う 3771 柵を検出した。柵はその大部分が破壊されているが、本来、石組柵であったと考えられ、東端に石組みが遺存していた。石組溝は石組の中に丸瓦を土管状にして置き、3771 柵と繋がる部分は上部に石で蓋をしている。屋敷地中央東側で地鎮に伴う遺構を検出した。3258 地鎮は土坑の底部に銅製の容器を置き、その上部には丸瓦の玉縁を下にして筒状に合わせるものである。

そして東端には第2～3面を通じて、大規模な土坑が南北に連なるように掘削されていた。いわゆる廃棄土坑群と考えられ、陶磁器・土器・瓦や貝・魚骨の食糧残滓など多量の遺物が出土した。

2区北側の屋敷地Dは、屋敷地の裏手にあたる。第3面で水琴窟と考えられる口縁部を下にした土師質土器甕と敷石を検出した。手水鉢はないものの、蹲の可能性が考えられる。第2～4面を通じて大規模な土坑が重複し、土坑内からは廃棄された多量の遺物が出土した。



写真5 第3面 748 石組池 (西から)



写真6 第3面 841 土坑 (北から)



図3 古代（第9面）遺構全体図

次に第5～10面が三の丸以前に該当し、第5面は1区において16世紀と見られる南東から北西方向にのびる大溝を検出した。第6～8面では中世の水田と畠の耕作地を検出した。特に第6面は氾濫堆積層である砂に覆われていたため、水田畦畔や畠の畝が良好な状態で検出できた。

第9面で古代の掘立柱建物11棟・井戸・溝を検出した。そのうち掘立柱建物群は1・2区の標高の高い北半で検出され、西側の105～112掘立柱建物と東側の21・22・24掘立柱建物の2群に分けられる。西側の8棟の掘立柱建物のうち、1棟は総柱建物である。106・107掘立柱建物には新旧関係があり、建て替えと考えられる。掘立柱建物の柱穴からは8世紀後半の坏が出土していることから、建て替えがあるにしても、当該期の建物群であると考えられる。そしてこれらの建物群を区画するように、4945溝が建物群の東側から南側へとL字形に屈曲し廻っている。

第10面は古墳時代前期の溝、土坑を検出した。特筆できる遺構に4962土坑がある。土坑は、規模が長軸2.7m、短軸1.7mの不整形な浅い掘り込みである。土坑内からは、土師器とともに鉾滓や炭、台石あるいは砥石と考えられる礫が出土した。

3. まとめ

今回の調査では、現地表面下の近代から地下5mの古墳時代前期まで10面に及ぶ遺構面を検出した。近世では武家屋敷を構成する建物・池・土坑等の多数の遺構・遺物を検出した。特に調査地は複数の屋敷地にわたっていたが屋敷地境が判明したことで、ほぼ「和歌山城下町絵図」と同じような区画で屋敷地が配されていたことがわかった。そしてそれぞれの屋敷地には高低差があり、雛壇状に平坦地を造成していたことも明らかになり、計画的に屋敷配置が行われたことが伺われる。

中世に一带は水田や畠の耕作地として利用され、溜池などの灌漑施設も検出した。

古代では掘立柱建物群を検出した。周辺からは複弁蓮花紋軒丸瓦や平瓦も出土しており、公的な施設の可能性も考えられる。このように近世のみならず古代に至るまでの様相が明らかになったことは大きな成果といえよう。



写真7 2区 古代(第9面) 掘立柱建物群全景(南から)

和歌山城北側地域における土地利用の変遷

— 和歌山市 和歌山城跡三の丸の発掘調査 —

公益財団法人和歌山県文化財センター 川崎雅史

1. はじめに

和歌山城跡の発掘調査は、和歌山城の北側に位置する市立伏虎中学校の跡地に和歌山県立医科大学薬学部が新築されることに起因する。中学校跡地は道路を挟んで北敷地と南敷地に分かれ、北敷地と南敷地の北側には県立医科大学薬学部が、南敷地の南側には和歌山市民会館が建築されることになっている。

調査は、平成29年11月から平成31年1月の期間で実施した。調査面積は約4,200㎡で、調査区は1～4区の4区画に分かれ、南敷地が1・2区、北敷地が3・4区で、それぞれの敷地で反転して調査を行った。調査区付近の標高は約5mで、地表下約4m余りまで掘り下げ、弥生時代から近世にかけての各時代の遺構や遺構面の調査を行うことができた。ここでは、発掘調査の概要を紹介するとともに、弥生時代以降の土地利用の変遷を追ってみる。

2. 和歌山城の位置と環境

和歌山城は、紀の川の河口域を占める和歌山平野の中ほどに位置し、独立丘陵で三波川変成帯の岩山である岡山（虎伏山）と麓の砂丘部を中心に築かれた平山城である。その構造は、標高40～50mの岡山に天守と本丸を置き、その麓に内堀などで囲まれた二の丸、西の丸、砂の丸、南の丸を配している。また、城の北から東にかけては内堀と外堀に囲まれた三の丸を置いている。

和歌山城の天守・本丸・二の丸の中核部分とそれらを囲む内堀までの範囲は、昭和6年に国指定史跡に指定されており、おおよそ三の丸と外堀の範囲については、周知の埋蔵文化財包蔵地「和歌山城跡」となっている。和歌山城は、羽柴秀吉の紀州攻めの後、秀吉によって築かれ、16世紀末頃には桑山氏が城代を務め、江戸時代初期には浅野氏の、それ以後は紀州徳川家の居城であった。また、調査区が位置する三の丸は、江戸時代を通じて家臣の屋敷地であった。なお、和歌山城下町については、北は紀の川、東は和歌川、南は堀止までの範囲とすることができる。

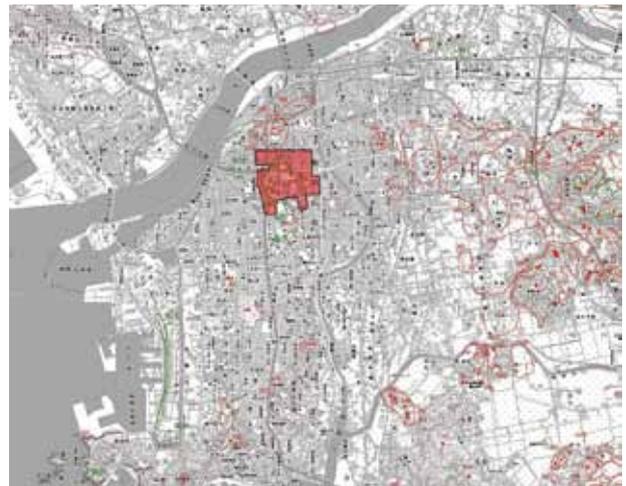


図1 和歌山城跡位置図



図2 調査区位置図

3. 基本層序

調査の対象となる遺構面は9面で、江戸時代が4面、織豊期を含む中世以前が5面となっているが、実際はそれ以上の遺構面が存在し、場合に応じて調査を行っている。基本的な層序は、北敷地・南敷地ともほぼ同じであるが、各層位の厚さは各所で異なり、現地表面の標高についても、南側に比べ北側がかなり低くなっている。

第1層は近代以降の整地土である。現在の地表面以下には学校敷地の整地土があり、それ以下には近現代の整地が繰り返し行われ、いくつかの生活面が形成されている。それらの中には昭和20年の空襲被災面も認められる。

江戸時代の遺構面は第2～6層上面に形成されており、整地により生活面の嵩上げを行っている。また、第6層は南西側に高くなっていることから、北東側に向かって整地土が厚くなっており、第5層も2区付近では存在しない箇所がある。

江戸時代の遺構面の下は、自然堆積（風成堆積）した砂層（第6層）で、その下に16世紀後半から末頃（織豊期）の遺構面が複数面形成されている。

第5遺構面以下は、中世の耕作面が続き、上方の面は畝として、下方の面は水田として土地利用されていたことが窺える。マンガン沈殿が著しい第11・12層上面を第6（第6'）遺構面として調査を行っている。その下部にも水平堆積した層位（水田面）が続くが、古代の遺物を包含する第15・16層の下面をそれぞれ第7遺構面、第8遺構面としている。また、第17層下面は古墳時代以前で第9遺構面として調査している。第19層はシルト混じりの細砂層で、湧水により崩落を繰り返す安定しない層位であり、これより下位には遺構面は存在しないと考えられる。

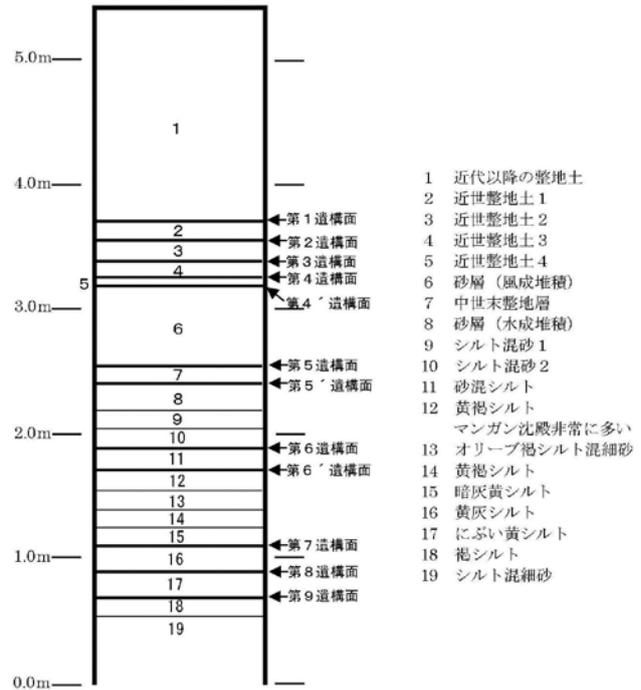


図3 基本層位

4. 調査の成果

江戸時代

第1遺構面 江戸時代終わり頃の遺構面であると考えられる。攪乱が著しく検出した遺構は希薄で、塵芥処理穴（ごみ穴）と考えられる大型土坑や小土坑などがある。2区で検出している耕作溝については、屋敷境を跨いで存在し、時期的には検討を要する。

第2遺構面 18世紀から江戸時代終わり頃の遺構面であると考えられる。検出した遺構には、



写真1 3・4区 江戸時代の遺構

塵芥処理穴と考えられる大型土坑や小土坑、溜桝、蹲踞、敷石遺構などがある。

第3遺構面 17世紀から18世紀の遺構面であると考えられる。検出した遺構には屋敷境と考えられる石列や礎石建物、塵芥処理穴と考えられる大型土坑、竈、土坑、井戸、石組み排水溝などがある。1・2区で検出した建物は、規模から主屋であった可能性がある。



写真2 1・2区 織豊期の大溝と畠

第4遺構面 17世紀の遺構面である。検出した遺構には土堀基礎、井戸、地下式倉庫、大型土坑、池状遺構、溜桝状遺構などがある。

第4'遺構面 17世紀初め頃の遺構面である。検出した遺構には、屋敷境の溝、柵、掘立柱建物、井戸、地下式倉庫、土坑などがある。

織豊期

第5遺構面 16世紀後半から末頃の遺構面である。検出した遺構には、大溝（堀）、畠の畝などがある。これらは、自然堆積した砂に埋没した状況で検出できた。畠の畝は、大溝の西側で畝幅が約1.5m間隔と規則正しく作られており、畝の残存状況も良好であったことから耕作時に一気に埋没した可能性がある。

第5'遺構面 16世紀後半から末頃の遺構面で、基本的に第5遺構面と大きく時期差はないものと考えられる。大溝の西側では第5遺構面の畠の畝の下に一時期古い畠の畝を確認している。大溝の東側では畑の畝の下から井戸、土坑などを検出している。

室町時代以前

第6遺構面 **第6'遺構面** 15世紀頃の耕作面であると考えられ、水田の耕作溝や畦畔などを検出した。耕作溝の方向は東西方向と南北方向のものが交差する状態で検出している。第5遺構面との間に存在する面は、畠として利用されていたと考えられる。



写真3 3・4区 室町時代の耕作痕



写真4 3・4区 古代の水田畦畔と水路

第7遺構面 11～12世紀頃の遺構面であると考えられる。水田耕作に伴う水路の可能性ある溝状遺構、大・小の畦畔、井戸などがある。東側で遺物の出土が多いことから、直近に集落の存在が考えられる。



写真5 1・2区 古墳時代の遺構

第8遺構面 9～10世紀頃の遺構面で、第7遺構面と同様に耕作に伴うと考えられる溝状遺構、大・小の畦畔などがある。1区の東側で遺物の出土が多く、直近に集落の存在が考えられる。

第9遺構面 古墳時代の遺構面であると考えられ、西端付近では遺構面が硬化していた。溝状遺構は西南西－東北東方向とそれに直交する方向に長く伸び、これらは水田耕作に伴うものであると考えられる。また、4区ではこの時期の溝の下部で、弥生時代と考えられる溝を検出している。

5. まとめとして

江戸時代

検出した遺構は、浅野家・紀州徳川家の家臣の屋敷地に伴うものである。井戸は約50基検出しており、屋敷地内にいくつもの井戸を持ち、また屋敷地を嵩上げするごとに井戸を掘削していたことが窺える。これらの井側には瓦積み・石積み・桶・曲物・素掘りなどあり、種類が豊富である。深いもので標高－1.0m以下まで掘り下げており、地盤が弱いことから構築は難しかったと考えられが、工法の一つに、桶を落とし込みながら掘削していたことも確認している。

1区で検出した地下式倉庫は石積みで、かなり破壊されているが、長さ5m、幅2mで、深さ0.7m残存していた。使用していた石材には城の石垣に使用するような大きなものが多く、矢穴や刻印が認められる。4区で検出した半地下式の竈は2基並立するもので、2基とも直径約0.85m、深さ0.7mと大型のもので、よく似た構造の竈が兵庫県伊丹郷町遺跡、姫路城下町遺跡などで見つかっている。大型の竈は炊飯用の竈とは異なり、大量の湯を沸かすのに利用されたと考えられており、兵庫県で見つかっている竈は、酒造りや醤油造りに利用されたと評価されている。



写真6 4区 江戸時代の半地下式竈



写真7 1区 江戸時代の地下式倉庫

また、3区の井戸から出土している大型の石臼は、直径58cm、高さ30cmあり、一人では回すことができない大きさである。大型石臼の利用方法については、民俗例などから火薬製造を挙げることができるが、屋敷地内で火薬製造は考え難く、他の品物の製造に使われたと考えられる。これらの竈・石臼は、その規模や大きさから日常生活に使うものでないことから、屋敷内の生産作業について文献史料も含め検討する必要がある。

検出した土坑には、塵芥処理穴（ごみ穴）と考えられる土坑が多く検出されているが、それらの中に木製品を多量に廃棄した土坑が複数ある。深く掘削されたことで、常時水分があり、密封された状態であったことから、良好に木製品が遺存したもので、これらには漆椀や下駄・箸・折敷・曲物・荷札などの他に、鳥籠や茶筌など発掘調査では出土しないような製品まである。土器類以外にも、これらの木製品からも屋敷地内の生活の様子を窺うことができる。

織豊期

大溝は、1・2区から3区・4区を縦断するように北北西－南南東方向に伸び、4区付近で西方に折れていることが明らかになっている。幅約8m、深さ約2mの規模で、土層の堆積からも水が流れた状況でもないこと、壁の立ち上がりが急であることから織豊期の城下町を区画する堀であった可能性がある。第5遺構面が形成された時期に掘削され、第5遺構面の時期も存在していたことになるが、第5遺構面では、大溝を境に東側で井戸や土坑、大溝より西側で畠を検出している。また、第5遺構面では、大溝の西側だけでなく東側も畠となっており、大溝より東側の土地利用が変化していることが窺える。第5遺構面は、砂層によって一気に埋まっているが、この砂は調査区付近を含め和歌山城周辺に広く厚く堆積して砂丘を形成していることが、和歌山市が行った発掘調査などで明らかになっている。第5遺構面の時期が、景德鎮窯・漳州窯染付、備前焼・瀬戸美濃系陶器などの出土遺物から16世紀末頃であり、砂層の上面が17世紀初頭頃であることから江戸時代の直前あるいは極初期に一気に砂の堆積があったことになる。和歌山城下町が桑山期から浅野期にかけて連綿と続くのではなく、砂が厚く堆積する期間の中断期があり、更に、この時期大きく地形が変化していることが窺える。地形変化をもたらした原因については、大溝の西の海浜部が桑山期には開発されておらず松等が生い茂っていたものが、江戸時代になって城下町形成により松等の防風林を伐開されたことによるもので、短期間に一気に砂丘が形成されたと推定される。

室町時代以前

古代から中世にかけては、耕作に伴う鋤溝や水路と考えられる溝や水田畦畔を検出しており、水田耕作などの生産域であったことが窺える。ただ、東側に限れば、井戸が検出されていること、西側に比べ遺物が多く出土していることなどから、直近に集落があったことが想像できる。

畦畔や溝・鋤溝の方向、すなわち地割の方向は、江戸時代以降の町割りの方向が正方位なの



写真8 1区 古代から中世にかけての堆積

に対して南北軸がやや西偏する。この方向は、JR和歌山駅東方の水田地割とほぼ同じ方向で、規則性が窺えるものの、畦畔には弧状に延びているものがあり、また、小区画の水田も存在することから条里に則り整然と作られた水田区画ではなかったと考えられる。遺物のなかで特筆できるものとして古代の蓮華文軒丸瓦があり、付近に文献などには登場しない寺あるいは官衙（役所）が存在した可能性がある。

調査では、散発的に弥生時代の土器や石鏃、サヌカイト剥片などが出土しているが、4区の第9遺構面において古墳時代の溝の下部で検出した弥生時代中期と考えられる溝は、規模が幅2.5～3.5m、深さ約0.6mあり、一直線に延びることや自然流路に見られるような流れ堆積がないことから、水田耕作に伴う水路の用途が考えられる。この面の標高が1m未満であるものの、和歌山城跡周辺においても弥生時代中期頃にはすでに開発され、直近に集落が存在していた可能性がある。



写真9 1区出土の古代瓦



写真10 弥生時代の水路

以上の事柄を整理すると、和歌山城北側地域で人々が生活を始めるのは弥生時代中期頃で、今回の調査区付近は集落隣接地の生産域であった可能性がある。古墳時代以降中世にかけても水田などとして土地利用が行われ、9～12世紀頃には隣接地に集落等が存在した可能性が高い。古代の蓮華文軒丸瓦の出土から、付近に寺や官衙の存在が窺え、『日本霊異記』にある「宇治保」あるいは『続日本紀』にある「片岡里」との関係が注目されよう。また、中世において当地は、海部郡雑賀荘に属した「宇治郷」にも比定することもできる。

安土桃山時代になり、調査区付近は大きく改変が行われ、大溝が掘削される。調査区の東側では集落が存在するが、西側では畠地が広がっていたことが窺える。このことは、桑山期の城下町は、浅野期以降の城下町とは大きく異なっていることになる。和歌山城は岡山を中心に桑山期に石垣を築くなどの普請が行われたとされるが、織豊期の地盤高や大溝の存在・方向などから、現在でも残る和歌山城を囲む堀は江戸時代以降になって掘削されたものと考えられる。

16世紀末頃から17世紀初頭にかけて、調査区西側を中心に一気に砂が堆積して砂丘が形成され、その上に江戸時代の城下町が築かれことになる。それまで、調査区東側の標高がやや高かったものが、砂丘によって逆に西側の方が高くなり、その地形にあわせて西側に向かって高くなる屋敷地が階段状に造成されたことが窺える。

熊野水軍の本拠・居館の様相

— 西牟婁郡白浜町 安宅本城跡の発掘調査 —

白浜町教育委員会 佐藤純一

1. はじめに—安宅氏城館群—

安宅氏城館群は、安宅氏が日置川下流域（安宅荘）を中心として築いた8箇所の城跡を指す。安宅荘は、「関東成敗地」として執権北条氏の影響下にあったが、鎌倉時代末期には「熊野海賊」が熊野灘において猛威を振るっており、それらを抑える役割を担った安宅氏が、北条氏によって阿波国から派遣されたと考えられている。

安宅本城跡は、平地の居館であり現在では宅地化が著しいが、小字「城ノ内」という名称が残っており、湊や侍屋敷、町場があったと推定されている。八幡山城跡は、本城跡の詰めの城であり、根小屋式山城となる。大野城跡や大向出城跡は、河川及び海上交通を見張るための城とみられる。勝山城跡は、標高212mの高所に位置し、荘域内を見渡せる立地条件の良い城跡である。中山城跡は、安宅地域よりやや上流に位置する田野井地域の独立丘陵に築かれた館城で、方形プランを持った非常に居住性の高い城となっている。土井城跡も同じく田野井地域に位置するが、世界遺産である熊野参詣道大辺路から派生する街道沿いに位置しており、安宅荘への入口側を押さえる目的を果たしている。要害山城跡は、安宅荘の出口側（富田荘側）に位置し、土井城跡と対となる役割を果たす。

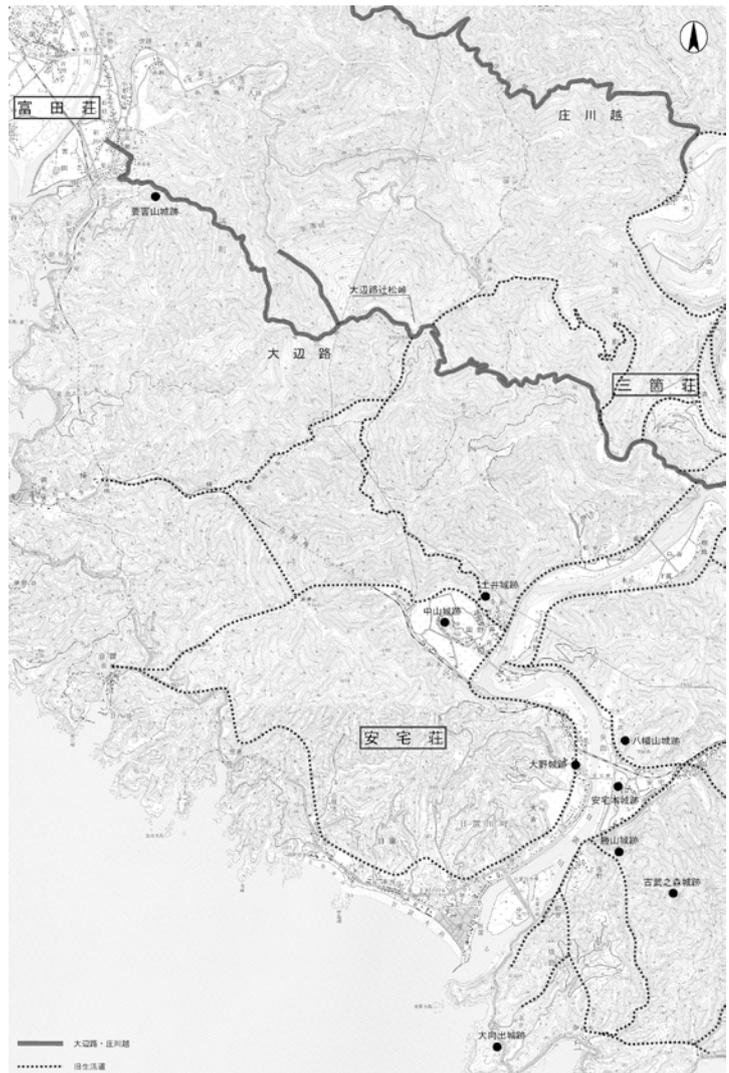


図1 安宅氏城館群位置図

安宅氏城館群は、それぞれの城跡が非常にまとまった形で良好に遺存しており、それらが相互に関連している状況を把握することができる。それは、安宅氏という在地領主層が日置川下流域を中心にして、排他的な領域支配をおこなっていたことの証左となる。また、良好な古文書群（安宅家文書・久木小山家文書）からも、安宅氏の動向を追うことができる。

白浜町は、以前から安宅氏城館群の国指定史跡を目指して調査を進めてきた。調査は指定のための基礎資料の蓄積を目的としたものとなっている。

2. 安宅本城跡（安宅氏居館跡）について

周知の埋蔵文化財包蔵地「安宅本城跡」は、日置川下流左岸（白浜町大字安宅）に立地し、三角状を呈する微高地上を範囲としている。名称については、近世に成立したとみられる軍記物『安宅一乱記』の記述によっており、軍記物としての性格上、実状をどこまで反映しているかは検討を要する。「安宅氏居館跡」については、「安宅本城跡」の範囲内において、さらに安宅氏の本拠とみなされる南北を掘により区画された南北約 120 m、東西約 100 m の不整形の台形状を呈する範囲を指す。

安宅本城跡（安宅氏居館跡）は、安宅荘内の中心に位置するが、他の城跡と異なり平地に築かれた平城である。現状では宅地や田畑となっているため、調査以前はその様相について地割や地形から方形区画から居館跡を推測する程度であった。

安宅本城跡（安宅氏居館跡）の既往の調査としては、第 1 次調査として日置川町（現 白浜町）に委託された（公財）和歌山県文化財センターが平成 14 年度のトレンチ調査、白浜町教育委員会が実施した第 2 次調査（平成 21 年度）、第 3 次調査（平成 24 年度）、第 4 次調査（平成 29 年度）、第 5 次調査（平成 30 年度）がある。

また、近畿自動車道紀勢線建設工事に伴う試掘確認調査（平成 21・22 年度）や本発掘調査（平成 23 年度）が、和歌山県教育委員会・（公財）和歌山県文化財センターによって実施されているが、包蔵地範囲の外に位置しており、中世城館に関連する遺構・遺物は確認されていない（図 2）。[和歌山県教委 2012、（公財）和歌山県文化財センター 2012、白浜町教委 2014・2019]

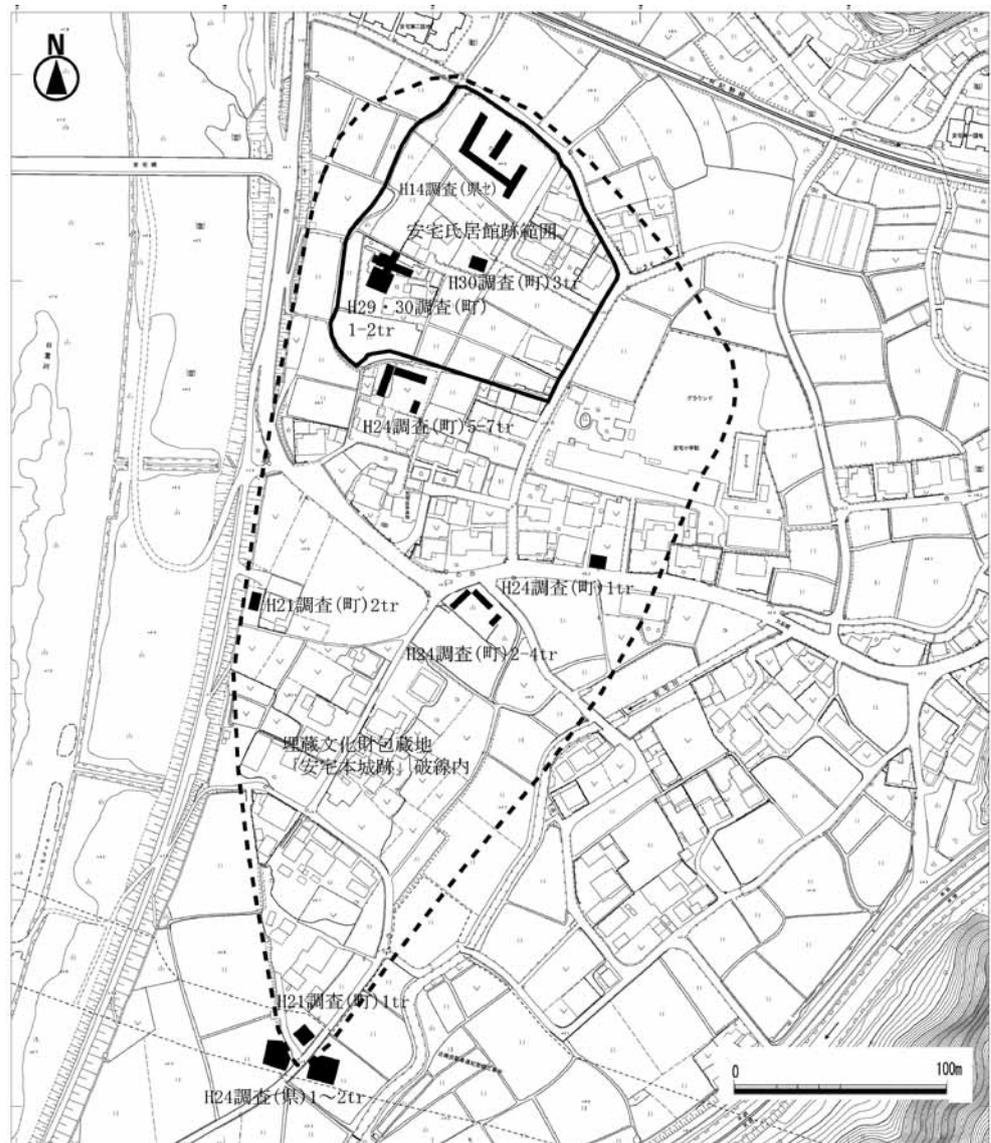


図 2 安宅本城跡調査位置図

3. 調査成果

今回報告する第4次調査（平成29年度）と第5次調査（平成30年度）については、「安宅氏居館跡」想定範囲内を対象としている。調査年次は異なるが連続して実施しており、またトレンチ設定位置も共通しているため、合せて報告したい。第4次調査と第5次調査を通じてトレンチを拡張しており、最終的な調査面積は、約100㎡を測る。

基本層序としては、1層・現代耕作土層、2層・近代耕作土層、3層・中～近世包含層（鉄分付着が著しい）、4層・弥生～中世包含層、5層・ベース土層（黄褐色シルト）となっており、3層と4層上面で遺構を検出し、それぞれ第1遺構面、第2遺構面とした。

第1遺構面は、近世後半～近代期、第2遺構面は、中世期の遺構が中心と考えられる。

また、内容確認が目的の調査であるため、遺構については完掘はせずに、基本的に半裁の状態地下保存している。

調査地点1では、平行する溝15及び溝16を検出した。溝15については、溝16に流れ込む溝が検出されている。この溝の両側には、対応する二対の杭跡が確認されており、溝16の流量管理を目的とした堰状の役割を担ったと考えられる。東西方向に走る溝16については、トレンチ設定の規制により、全体像を把握することはできなかったが、幅5m以上・深さ約80～100cmを測る。これらは、安宅氏居館跡の内部を区画する溝と考えられる。溝15と溝16は、連結する溝の存在からも同時代に機能していたことが想定されるが、さらにそれぞれの埋土から出土した備前焼すり鉢の破片が接合したことから、廃絶時期も同じであると考えられる。備前焼すり鉢は、16世紀半ば～後半代のものとみられる。

また、トレンチの南端部には、素掘りの井戸1が築かれている。井戸1の埋土からは、礎石と考えられる平石とともに、白磁、備前焼や瓦が出土している。溝15内の柱穴の性格については、検討課題だが、埋土より中世土師皿や碎片となった銅銭が出土する。



写真1 安宅本城跡遠景（南より）



写真2 5次調査調査地点1 全景



写真3 5次調査調査地点1（北より）



写真4 5次調査調査地点2 井戸2

調査地点2では、石組みの井戸2が検出された。石組み内法約122cm、石組み（裏込め含む）約255cm、掘形は現状で約380cm以上、深さ約220cmを測る。井戸2からは、16世紀後半から17世紀初頭～前半の遺物がおもに出土し、本城跡の廃絶時期を考える上で貴重な資料である。

今回検出された遺構のうち、溝15・16と井戸1、2ではやや時期差がある。どちらも16世紀後半代が中心となるが、溝15・16からは16世紀半ばを含むやや古相のものが、井戸からは17世紀初頭～前半代を含むものがよくみられる。居館の廃絶後も、しばらく井戸が開口していた可能性がある。溝については、一挙に埋没したとみられる。

第4次・5次調査出土の中世期の土器について、今回の出土の大半を占めるのは、土師器（土師皿）であった。これは、他の安宅荘の城館群とは、異なる様相を呈している。

産地別で組成をみると、紀伊北中部・近畿地方・瀬戸内地方といった西側からの搬入品が453点、東海地方を主とする東側からの搬入品が131点となる。西側からの搬入品が多い傾向となるが、東側からの搬入品も看過できない数量である。また、輸入陶磁器についても、119点と比率

種別	破片数
縄文土器	1
弥生土器	132
土師器	742
須恵器	47
灰釉陶器	1
黒色土器	21
瓦器	83
中世須恵器	72
中世土師器	2,037
土師質・瓦質	23
中世陶器	163
輸入陶磁器	119
近世土師器	2
近世瀬戸美濃	9
肥前陶磁器	63
その他近世陶器	15
近・現代焼物	49
平・丸・棧瓦	38
土製品	118
石器・石製品	36
金属器	271
木製品	1
自然遺物	199
その他	12
総破片数	4,254

産地	種類	破片数
紀伊北中部	瓦器	83
近畿地方	瓦質土器	18
	京都系土師皿	3
瀬戸内地方	播磨型土鍋	114
	東播系須恵器	6
	備前焼	98
東海地方	山茶碗	66
	瀬戸美濃系陶器	52
	志野焼	1
	常滑焼	10
	南伊勢系土鍋	2
中国（輸入陶磁器）	白磁	41
	青磁	43
	染付	31
	褐釉	2
	黒釉	1
朝鮮（輸入陶磁器）	褐釉	1
産地不明 （搬入品・地元産 含む）	土師器	1,917
	土師質土器	5
	陶磁器	2
総破片数		2,496

表1 第4次・5次調査出土遺物組成表

としては高い数値を表す。このうち、朝鮮半島産の褐釉船徳利は1点のみであるが、日置川流域で初めて確認されたものである。

おおまかな流れとしては、中世前期（鎌倉期～南北朝）には東西双方からの搬入が認められ、勢力が拮抗しているかのような状況であるが、中世後期（室町～戦国期）には西側からの影響が強くなる傾向が読み取れる。

しかしながら、中世後期の東海地方の土器として、南伊勢系土師器（鍋）が日置川流域で初めて出土した。南伊勢系土師器（鍋）は、紀伊半島南部東岸の川関遺跡では大量に搬入していることが確認されているが、紀伊半島南部以西では、ほとんど見つかっていない。[伊藤 1992、2007] 今回、点数は2点と少ないが、確実に搬入していることがわかり、面的な分布範囲が紀伊半島南部西岸に拡充したことになる。ただし、恒常的な搬入ではないことは明らかであり、その意義や性格については検討を要する。

染付・青磁・白磁などの輸入陶磁器のうち、皿や碗だけでなく、香炉や合子、盤といった威信財（高級品）が出土している点が挙げられる。

溝 16 周辺からは、鍛冶関連遺物（鋳滓や羽口など）の出土が顕著であったが、明確な鍛冶遺構の検出はなかった。

そのほか、県内では類例が乏しい鉛製の鉄砲玉が3点出土している。そのうち1点は、断面半円状を呈しており、発射された痕跡と捉えることができる。資料は、大きく変形しているため、安宅本城跡出土資料の平均値をとることは難しいが、直径約 1.2cm、重量約 8～10g 程度が想定でき、この規格性を持つ鉄砲玉を用いた鉄砲は、二匁五分（9.375g）の鉄砲玉を使用する「小筒」と呼ばれるもので、最も小型の火縄銃といわれる [北野 2018]。このことから、県内出土例については、規格性が非常に高いことが窺える。しかしながら、本資料についての理化学的な分析は未実施であり、鉛の産地や鉄砲玉そのものの流通経路についての検討は、今後の課題としたい。



写真 5 鉛製鉄砲玉

4. まとめ

今回の発掘調査では、明確に中世遺構面を確認でき、12世紀から16世紀後半代（一部17世紀初頭～前半代）の遺物が出土している。とくに、溝 15 や溝 16 の堆積状況や遺物の出土状況より、16世紀後半～17世紀初頭に埋没したことが確認できていることから、安宅氏の拠点としての安宅氏居館跡もその時期には役目を終えたと推測できる。

これまでの調査成果をもとに、安宅氏の本拠・居館の様相を復元すると、小字城ノ内を中心に、幅約 10～13m 程度の堀で北側と南側を区画し、西側は自然地形による低湿地状となっていたと想定される。東側の区画については、地下レーダ探査による遺構反応の多寡による判断となる。本城跡の規模は、南北約 120 m、東西約 100 m の不整形な台形状を呈する。

発掘調査成果より、本拠としての本城跡は安宅氏の来住（14世紀代か）から16世紀代にかけ

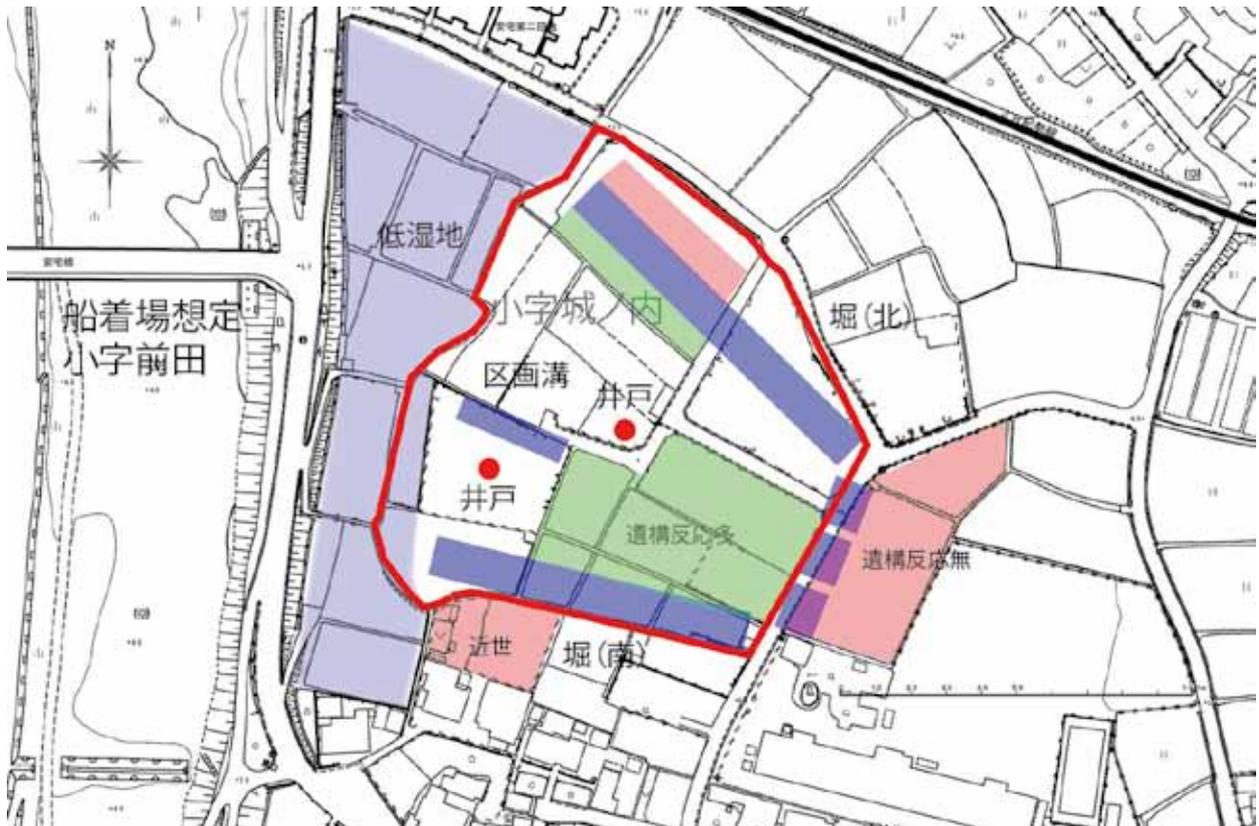


図3 本拠・居館の復元模式図

て営まれていたと考えられ、16世紀後半～17世紀初頭頃には廃絶され、近世から現代にかけて田畑となっていた。その後、昭和20～30年代に再開発され、宅地化している。

本城跡の特徴として、河川からの比高の著しく低い微高地に営まれており、常に水害の危険があったことが従前より指摘されている。安宅氏があえて、この地に本拠を築いた理由として、水運の利便性を追及したことが挙げられ、船着場が居館と隣接する形で想定されていることも関連する。さらに、16世紀前半代には、荘域内の寺社整備と関連して、日置湊の整備も進められたと考えられ、日置湊から安宅の船着場・本拠への連携も想定できる。

今回の調査成果は、これまでの古文書等から研究されてきた安宅氏の来歴と期を一にするものであり、今後調査・研究を進めることにより、さらに具体的な安宅氏の姿を描けるものと考えている。

【引用文献】

- 伊藤裕偉 1992 「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第1号
- 伊藤裕偉 2007 「南伊勢系土師器の分布」『中世伊勢湾岸の湊津と地域構造』岩田書院
- 北野隆亮 2018 「紀伊における戦国時代の鉛インゴットと鉛製鉄砲玉」『鑄造遺跡研究資料2018』
- 白浜町教育委員会 2014 『安宅荘中世城郭群総合調査報告書』
- 白浜町教育委員会 2019 『安宅荘中世城郭群総合調査報告書 補遺編』
- 和歌山県教育委員会 2012 『和歌山県埋蔵文化財調査年報－平成22年度－』
- 公益財団法人和歌山県文化財センター 2012 『公益財団法人和歌山県文化財センター年報2011』

奉公衆山本氏の幻の館

— 西牟婁郡上富田町 坂本付城跡の発掘調査 —

和歌山県教育委員会 田中元浩
上富田町教育委員会 小倉英樹

1. はじめに

上富田町内には、室町幕府奉公衆として独自の領域支配を行った山本氏の城館群が多数存在する。しかしながら、本城である竜松山城跡をはじめとしてそのすべてが未指定であり、法的な保護が十分に図られていない状況にある。このため、上富田町では平成 30 年度より山本氏に関連する中世城館の保存及び活用を目的として、総合調査を実施することとなった。

総合調査は、文献史学、城郭史、考古学、地域史の各分野の専門家からなる調査検討委員会を組織し、竜松山城跡及び坂本付城跡の調査を実施する。このうち、平成 30 年度は坂本付城跡を対象とし、その範囲と構造を明らかにするために測量調査及び発掘調査を実施した。

2. 山本氏の来歴と坂本付城跡

1) 奉公衆山本氏

山本氏は上富田町市ノ瀬を拠点とし、南北朝時代から戦国時代にかけて紀南地域に勢力を伸ばした「戦国領主」の典型である。上富田町域は「くちくまの」と呼ばれるように、山本氏は熊野

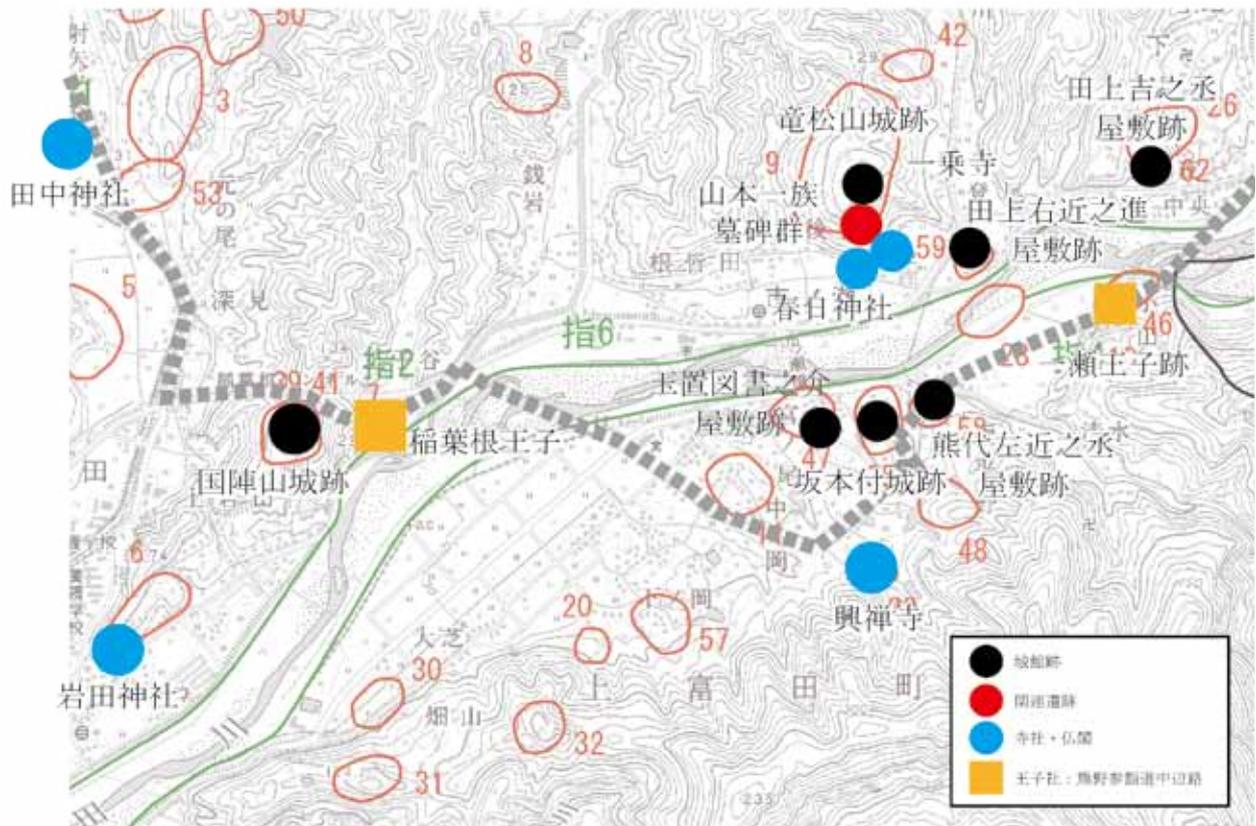


図 1 調査対象遺跡地図

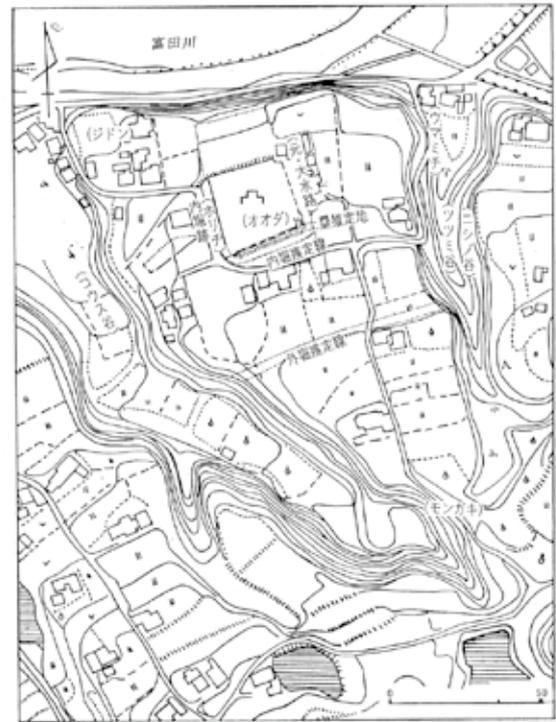
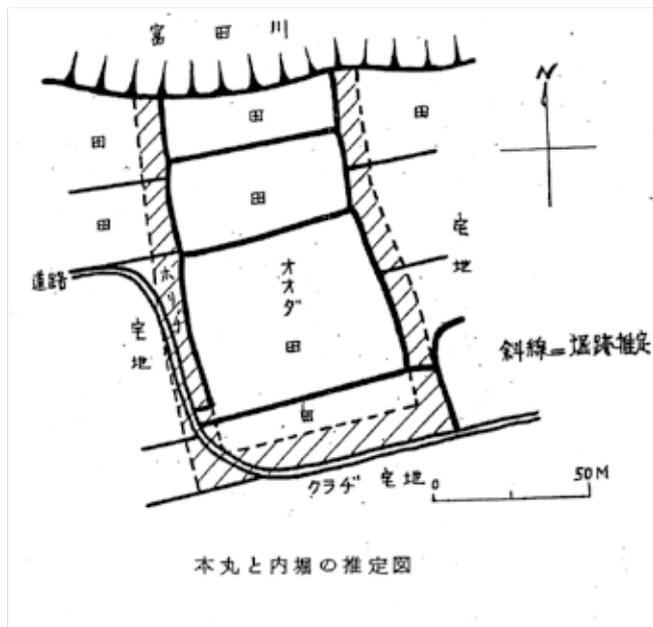


図2 坂本付城跡縄張り想定図 (左：上富田町文化の会、右：水島 1988)

参詣道中辺路のルートの一部を抑え、応永 34 (1427) 年には將軍足利義満の側室「北野殿」の熊野詣に際し、供給を行ったことで知られる (『熊野詣日記』宮内庁書陵部図書寮文庫蔵)。山本氏は室町時代には近畿各地の戦にも参加し、同じく奉公衆として勢力を伸ばした湯川氏・玉置氏と行動を共にし、紀伊国守護畠山家の分国支配に協力するようになる (『西向小山家文書』『西向小山家文書』神奈川大学日本常民文化研究所蔵)。また戦国時代には、日置川流域の熊野水軍安宅氏・小山氏との連携も認められる (『山本忠隆書状』『久木小山家文書』和歌山県立博物館蔵)。

天正 13 (1585) 年の羽柴秀吉の紀州攻めにおいては、山本主膳守康忠は秀吉軍に徹底抗戦し、最後には山本主膳守康忠は湯川氏らとともに熊野の山間部へ逃れる。天正 14 (1586) 年には天正の熊野一揆を主導し、紀伊にける中世終焉となる最後の抵抗を行った (『山本保忠判物』『和田家文書』和歌山市立博物館)。そして、天正 14 (1586) 年 11 月 4 日には豊臣秀長に降伏し、大和で殺害された (『多聞院日記』)。その後、山本氏は所領を没収されるが、江戸時代には山本氏の功績を称えた文書や伝承が残り (『興禅寺文書』興禅寺蔵)、現在でも「市ノ瀬大踊り」(県指定文化財) が踊り継がれるように、地域に山本氏の足跡と栄光を伝えている。

2) 坂本付城跡

坂本付城跡は、山本氏の館跡と考えられており、江戸時代の二次史料である『風土記御新撰二附御尋之品書上帳』(文化 5 (1808) 年) 及び『紀伊続風土記』(天保 10 (1839) 年) には、城の規模とともに、龍松山城の下を流れる富田川を隔てたところに山本氏代々の下屋敷があると記されている。しかしながら現在は「坂本」の地名は存在せず、坂本付城跡の所在地については長い間確認されていなかった。

その後、昭和 45 年頃に上富田町文化の会のメンバーによる地名・文献史料・現地踏査が行われ、調査の結果、現在の位置に坂本付城跡が存在したと結論付けられている (上富田町文化の会研究班 1972「まぼろしの館市ノ瀬坂本付城跡」『上富田町文化財』7、玉置善春 1972「紀南の中

世城郭跡を探る』『田邊文化財』15)。

しかし、発掘調査等は行われておらず、発掘調査による遺構の確認、年代、構造の解明については、今後の課題になっていた。

■ 3. 坂本付城跡の現況

坂本付城跡は上富田町市ノ瀬字両平野に所在し、河岸段丘上に位置する。河岸段丘の間には開析谷が樹状に広がっており、低地部については低湿地が展開すると考えられる。

南のもっとも平野が狭くなった範囲には「モンガキ」＝門垣の地名が、平野部中央には「ナカゴロ」＝中頃の地名が残されている。東西には開析谷「ツツミタニ（ニシノタニ）」及び「コウスタニ」が存在し、谷底から河岸段丘上までに8～15mの比高が存在する。開析谷の末端については沼地があったとされ、低湿な環境にあると考えられる（『田ノ上家文書』所在不詳）。北は富田川に向かって段丘崖が存在し、県道拡幅工事までは富田川に崖面がせり出し岩屏風のようにになっていた。館北東部には船着き場の存在が推定されており、「ウマミチ」などの地名が存在する。

これまでの地名調査により、方形地割をもつ「オオダ」付近に推定されている。「オオダ」の西には、「ホリジ」＝堀地と呼ばれている南北に細長い水田区画があり、内堀跡と推定されている。また、「オオダ」の西には「大水路」の地名が認められる。明治期の地籍図には大溝が記されており、富田川に向かって北に直線的に流れる。

「オオダ」の南には「クラジ」＝蔵地、南西には「コウミョウジ」＝光明寺などの地名が残されており、館跡に付属する施設が存在する可能性がある。また「オオダ」北西には「テンジンダ」が存在し、内郭の鬼門付近に社が存在する可能性がある。また、「テンジンダ」の西には、現在竹藪となっている区画があり、東西10m程度のくぼ地が存在する。

室町時代以前は、熊野参詣道は対岸の稲葉根王子から富田川の浅瀬を渡渉するルートが一般的であり、一瀬王子へ渡る参詣記事なども認められる。古道についての詳細ルートは不明であるが、稲葉根王子から根皆田付近で富田川を渡河し、中ノ岡の興善寺付近で段丘平野部の奥に至る。さらに杉山池付近をとおり下平野に入る。「モンガキ」付近で丘陵中央部まで折れ、坂本付城跡の存在する下平野中央部付近で北へと方向を変え「ツツミタニ」の谷部を渡り、上平野へ至る。上平野からは清水谷をとおり、一瀬王子に至るルートが推定されている。このため、坂本付城跡付近には熊野参詣道の一ルートが存在する可能性が高い。

■ 4. 調査成果

坂本付城跡は平地式の居館であり、内堀跡と水田区画、地名から東西約41m、南北約87mの方形居館と推定されている。西側の内堀については古写真から明らかではあるが、東側、南側の内堀については範囲が不明瞭である。そこで、館跡内郭の南側並びに西側の内堀跡及び外堀を中心に確認調査を実施することとした。

1 トレンチ 西側の内堀の北延長を確認する目的で1トレンチを設定した。

表土及び近現代の耕作土の下層では近世以前の堆積土が約0.5mの厚さで確認され、堀跡の埋土と考えられる。埋土については水成堆積に伴う堆積物などは確認されておらず、機能停止後に

徐々に埋没したと考えられる。埋土の下層からは中世、特に戦国期以降の所産と考えられる軒丸瓦及び軒平瓦が出土している。底面では東西の底部の立ち上がりを確認しており、逆台形状を呈する箱堀となる。これらのことから検出した遺構は堀跡であると判断され、坂本付城跡の内堀であると考えられる。

堀跡の規模は底面では幅約 3.2 m、検出最大幅で幅約 4.8 m 以上となり、内堀南肩から東側の水田区画まで幅約 5.2 m となる。深さは現状地表面からは約 1.08 m を測り、東側の水田区画の地表面からは約 1.7 m を測る。堀底中央部分では幅約 0.3 m、断面 U 字形の溝を検出している。埋土は灰色シルトを呈する。埋土の状況から、内堀機能時には水をたたえておらず空堀であったと考えられ、常時は中央の溝により排水を行っていたと考えられる。

2 トレンチ 「オオダ」の南についても東西に長い水田区画が存在しており、南側の堀跡の存在が想定された。表土及び床土を掘り下げると、トレンチ北側で盛土層を検出した。土層は南北で幅約 7.3 m の範囲で存在し、東西に延びる。

このため、盛土層は東西方向に構築された土塁状遺構と考えられ、上面は削平されている基底部分と考えられる。土塁の南については堆積土の状況から、窪地となっていたと考えられる。土塁状遺構の盛土及び周辺堆積土からは遺物の出土は認められなかった。

3 トレンチ 外堀を確認する目的で「ナカゴロ」付近に設定したトレンチである。現況で東西に長細い水田区画 2 か所を対象に設定した。ピット 2 基を検出している。周辺には地山に含まれる直径 0.1 ～ 0.2 m の礫が分布する。3 トレンチでは堀跡は検出されず、遺物の出土も近世以降のものであった。

4 トレンチ 西側の内堀の幅及び内郭部分の状況を明らかにするため、「ホリジ」から「オオダ」にかけて直交する形で設定したトレンチである。

「ホリジ」部分については現代の盛土、近現代の水田耕作土と近現代の石垣とその裏込め、近世の耕作土が存在する。これらの下層では、近世以前の堆積層とみられる黄灰色～灰色のシルト層を確認しており、1 トレンチの状況と一致することからこれらは堀跡と考えられ、内堀の一部と考えられる。内堀東側の底部の立ち上がりを確認しており、堀跡は逆台形状を呈する箱堀となる。また、東側の肩部については近現代の石垣の構築により失われているが、その立ち上がり角度から判断すると、ほぼ現在の「オオダ」の東端部分に相当すると考えられる。埋土からは火打石、基石と思われる円礫が出土しているが、土器類の出土は認められていない。トレンチの西端



写真1 1 トレンチ及び 2 トレンチ調査成果
(1：1 トレンチ堀北壁断面 南から、2：2 トレンチ土塁検出状況 南から)

の堀底部では浅く窪む溝状の遺構肩部を検出しており、1トレンチ同様、堀底中央部分に溝が存在すると思われる。堀跡の規模は底面では幅約2.8m以上、検出最大幅で幅約5.2m以上となる。深さは「ホリジ」地表面から約1.7m、「オオダ」第5層上面からは約2.0m、地表面からは約2.4mを測る。

「オオダ」部分については、溝状遺構及びピットを検出している。溝状遺構のうち、遺構1は内堀に向かって北東から南西方向に流れる幅0.4～0.5mの小溝である。遺構2はトレンチ北端で南北方向に検出しており、北延長部分は調査区外となる。

■ 5. まとめ

1) 坂本付城跡の復元

坂本付城跡の調査の結果、発掘調査により、内郭部分では西側で内堀となる堀跡を2か所検出し、南側では土塁跡と考えられる土塁状遺構を確認した。発掘調査により館跡に伴う遺構を確認するとともに館跡の復元に必要な範囲を確認することができた。

内郭では、西側の内堀を確認した。これまで「ホリジ」において地名及び水田区画から堀の存在が確認されていたが、発掘調査により1トレンチでは「ホリジ」の北延長部分の堀を確認するとともに、4トレンチでも「ホリジ」の水田区画の下層に内堀が存在することが確認できた。1トレンチの成果より、内堀は富田川に面する段丘崖まで続いていることが想定される。内堀の規模は、4トレンチでは検出最大幅5.2mを測る。4トレンチでは現在里道拡幅により、「ホリジ」の水田区画の一部が埋められており、里道の拡幅は現在の半分程度であり約1.6mが「ホリジ」



写真2 4トレンチ調査成果

(1：トレンチ全景 西から、2：「オオダ」遺構検出状況 西から、
3：「ホリジ」堀跡完掘状況 北西から、4：堀跡断面 北から)

であるとする、約 6.8 m の内堀が復元できる。深さについても、4 トレンチの「オオダ」部分の遺構面から内堀底部まで約 2.0 m を測り、本来の比高に近いと判断される。

また 2 トレンチでは土塁を確認し、内郭南側は直線的に土塁を設けている可能性が高まった。土塁の規模は基底部で幅約 7.3 m、上端部で幅約 5.1 m、高さ約 0.6 m を測る。土塁の南については堆積土の状況から、窪地となっていたと考えられる。土塁のある「コウミョウジ」の水田区画は「ホリジ」よりも一段高い位置にあることから、土塁が丘陵を東西に横断することで南側を区画し、東西の内堀端が土塁にとりつくような形状であったと想定できる。

さらに内郭北側については文献等に記述があるように富田川に面した段丘崖までであり、南側を 2 トレンチで確認した土塁とすると、内郭の南北の規模が復元される。内堀西側は「ホリジ」南端から、富田川に面する段丘崖までの間で長さ約 92 m となり、内郭の南北については土塁南端から富田川に面する段丘崖までの間で長さ約 100 m となる。

東側の内堀については、発掘調査を実施していないが、「オオダ」の北西、「テンジンダ」の西の区画では、東西 10 m 程度のくぼ地が存在し内堀の東側に相当すると考えられる。隣接地での家屋建設の際には、耕作土が厚く存在し、地山が確認されなかったという。また、明治期の地籍図には大溝が記されており、富田川に向かって北に直線的に流れる。このことから、内郭の東側は「テンジンダ」の西側の区画までを想定することができる。このため、内郭の東西については、1 トレンチ及び 4 トレンチで検出した西側内堀の東肩からの内郭東側のくぼ地西側までの距離を測ると約 70 m に復元できる。

また外堀については検出できなかったが、3 トレンチ以外の水田区画に外堀が存在する可能性が高い。『風土記御新撰二附御尋之品書上帳』1808（文化 5）年では 90 間程（163.6m）との記述があり、これが正しければ、160 m の堀跡の長さを確保できる水田は 3 トレンチのさらに北にしか存在せず、推定範囲がさらに絞り込まれると考えられる。「モンガキ」付近で丘陵中央部まで折れた推定熊野参詣道は、外堀推定位置付近でさらに北へと方向を変える。館跡の区画に古道の位置が対応することから蓋然性はより高まったと判断される。また外堀の南北には谷が存在しており、外郭を区画するものと考えられる。

以上の検討から、坂本付城跡を復元すると図 4 のとおりとなる。内郭は南北約 100 m、東西約 70 m に復元でき、最大で幅 6.8 m、深さ 2 m の内堀が東西に、さらに南側には東西約 75 m、幅

<p>『風土記御新撰二附御尋之品書上帳』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本丸 東西 23 間程 (41.814m) 南北 48 間程 (87.264m) ・内堀 東長 58 間程 (105.4m) = 東辺南北長 幅 4 間程 (7.2m) 深サ 3 間程 (5.4m) 南長 38 間程 (69m) = 東西長 幅同断 深サ同断 西長 58 間程 (105.4m) = 西辺南北長 幅同断 深サ同断 ・外堀 東西 90 間程 (163.6m) 幅 5 間程 (9.09m) 深サ 4 間程 (7.2m) 	<p>発掘調査による復元</p> <ul style="list-style-type: none"> ・館跡 調査未実施 ・内堀 (内郭) 南北長 100m (北段丘崖から 2 トレンチ土塁まで) 東西長 70m (1 トレンチ堀西端から東堀痕跡まで) 西堀幅 6.8m ? (4 トレンチ 5.2m + 1.6m 道幅) 西堀深さ 1.7m ・外堀 推定位置 160m ・外郭 南北 160m 東西 200m 以上
--	---

図 3 『風土記御新撰二附御尋之品書上帳』と発掘調査成果からみた坂本付城跡の規模

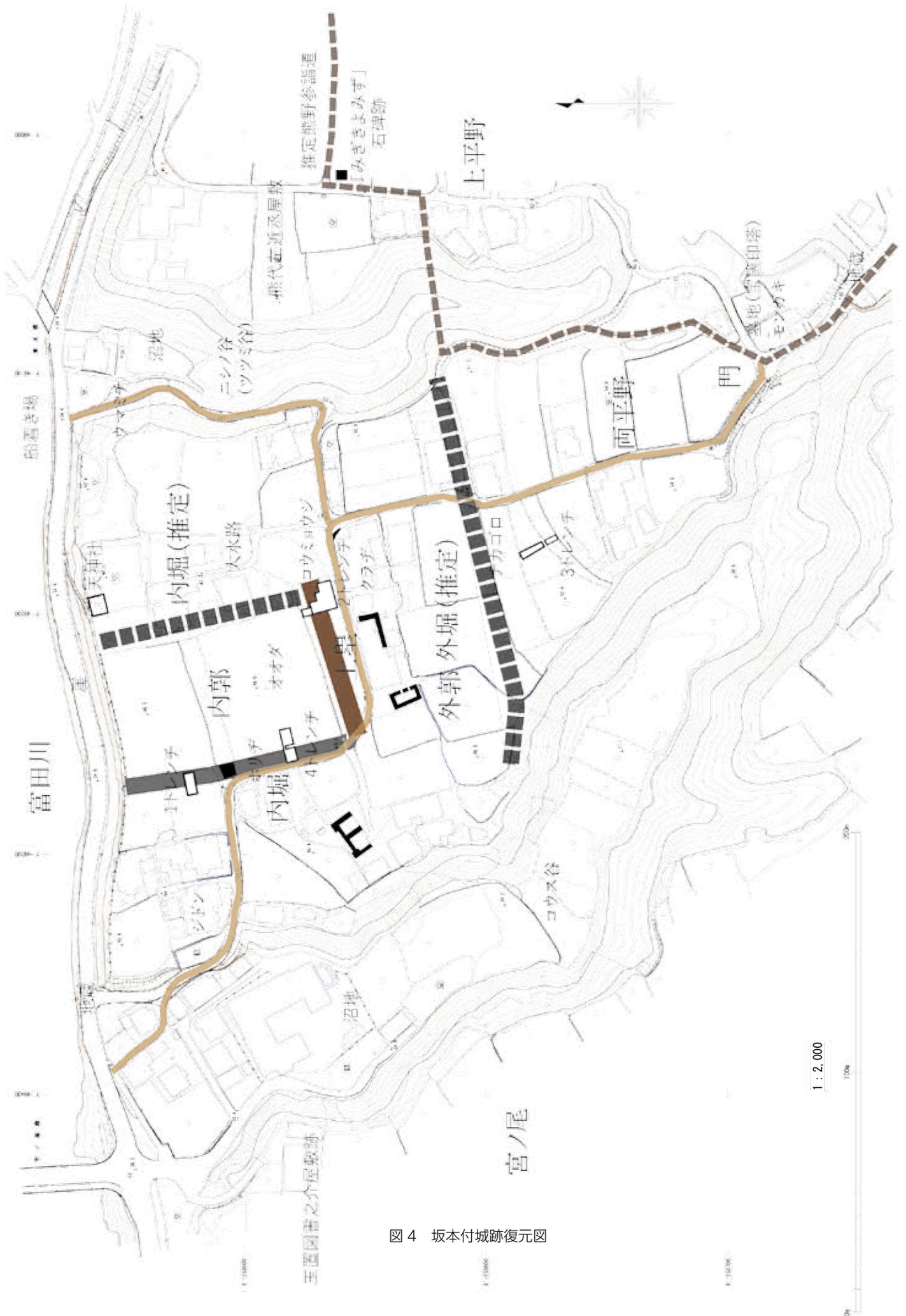


図4 坂本付城跡復元図

約7.3mの土塁が存在していたと考えられる。また、外郭は、南北160mの外堀に区画され、南北約160m以上、東西160m～220mに復元でき、奉公衆の館跡にふさわしい規模と考えられる。さらに、「モンガキ」付近には堀切状の地形が認められ、さらに館跡の規模は大きくなると考えられ、その範囲については丘陵全域におよぶ可能性が高い。

これらの発掘調査成果から得られた規模と『風土記御新撰二附御尋之品書上帳』に記された規模を比較すると、内堀（内郭）の規模がほぼ一致しており、堀の幅なども近似した値を示す。このため『風土記御新撰二附御尋之品書上帳』についても作成された段階には、中世段階の情報が明確に把握されていた、または堀跡などが当時の状況をとどめていたと考えられ、坂本付城跡の規模を復元するうえで有効な資料であると考えられる。

2) 坂本付城跡の歴史的評価

発掘調査の成果に基づく坂本付城跡の復元から、堀・土塁による内郭の構造、外堀及び古道を含む外郭の存在、北を河岸段丘、東西を深い開析谷で画する天然の要害を利用した好立地であることが明らかになった。外郭の推定規模から南北160m以上、東西160～220mに復元される。これらのことから、奉公衆の館跡として十分な規模と構造をもつとともに、単体の居館として機能していたと考えられる。このため、所謂「付城」のように補完的な城跡ではないと考えられる。

さらに、市ノ瀬には、『熊野詣日記』にあるように熊野参詣の渡河地点が近くに存在し、近世にも富田川の渡し場が存在する。船着き場伝承地や「市ノ瀬大踊り」（県指定文化財）にも船着き場に関する内容があるように、竜松山城跡及び坂本付城跡の周辺は河川・陸上交通の要衝であったと考えられる。

今回の発掘調査から推定する限り、外堀推定位置付近で推定熊野参詣道が屈曲し、一瀬王子へと至るルートが復元され、熊野参詣道の一部が館跡に隣接する状況を示す。室町期以降、熊野参詣道は富田川流域を通るルートから潮見峠道越のルートへ変更されるが、それ以前は熊野参詣においては坂本付城跡付近を通過するルートが存在していたと考えられる。

山本氏については、足利義満側室の北野殿の熊野参詣に際し、南部まで山本氏の出迎え市ノ瀬での供応を行うとともに、山中の護衛などの軍事動員などを行っている（『熊野詣日記』応永34（1427）年）。奉公衆については、「戦国領主」とされ、守護を介さない独自勢力として存在したことがうかがえる（矢田俊文1998「戦国期の奉公衆家」『中世日本戦国期権力構造の研究』）。また、「かも山の関の事、中村にかたく仰付らるへきよし申す」（『熊野詣日記』応永34（1427）年）など供応に際して、関の支配に関する便宜を図るよう訴えているように、独自の領域支配には関所の設置など交通を掌握していたと考えられる。

以上の室町時代の熊野参詣からは、山本氏が独自の領域支配、交通支配を行っていることが分かり、今回の発掘調査で得られた坂本付城跡の規模や、交通の要衝上に位置する特質は奉公衆の動向を遺構として明確に示す。龍松山城跡とともに、富田川流域を面的に支配する山本氏の地域支配拠点としての坂本付城跡の性格がうかがえるといえる。

弥生時代前期の生活域

— 和歌山市 和田岩坪遺跡の発掘調査 —

公益財団法人和歌山県文化財センター 土井孝之

当文化財センターでは、平成30年度事業として近畿農政局から委託を受けて、名草排水機場建設工事に先立ち、和田岩坪遺跡（図1の302）の発掘調査を実施した。

和田岩坪遺跡は、和歌山市和田に所在し、和歌山平野の南東部の和田川沿いに位置する。調査地の南側約600mには、神武天皇の長兄「五瀬命」を祭神とする竈山神社が鎮座している。この和歌山平野の南東部には、井辺遺跡（308）・神前遺跡（307）・和田遺跡（301）・和田II遺跡（408）・和田岩坪遺跡・坂田遺跡（435）など多くの遺跡が存在している。

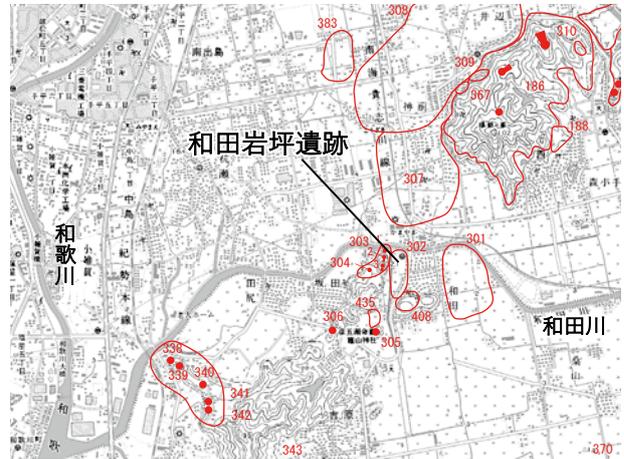


図1 和田岩坪遺跡の位置と周辺の遺跡（s = 1 : 70,000）

調査は、平成30年10月から同31年3月にかけて面積921㎡について実施した。

和田岩坪遺跡の調査は、昭和31年の名草川改修に伴う発見に端を発し、昭和56年の駐車場用地造成に伴う和歌山市教育委員会による小規模な調査が実施されている。

今回の調査では、調査地を大きく東西に分割して行い、西側の調査地から弥生時代終末期から古墳時代後期にかけて埋まった自然流路（川）を発見し、大量の土器・石器・木質遺物などが出土した。自然流路（川）の下層には弥生時代前期から中期・後期の遺物が出土する自然流路（川）の一部を確認している。

東側の調査地からは、弥生時代前期の墓の可能性のある土坑や溝、鎌倉時代の屋敷地を区画する堀、土器等の廃棄土坑、溜桝、焼土で埋まった土坑、建物の柱穴などが見つかった。

また、西側の自然流路（川）が東側と同じような平坦地になるのが鎌倉時代に入ってからであることも分かってきた。このことは、文献史料等から指摘されている当地域一帯の土地開発の時期と関係してくるものと思われる。

弥生時代前期の遺構・遺物の意義付け

調査で検出・出土したものの中で特に目を引くものの一つが、弥生時代前期に位置付けが可能な遺構・遺物である。これらは、1-1区の1自然流路の下位層（2自然流路）及び2-1区・2-3区の東半側に集中する。

現在のところ、近隣の範囲で当該期の時期の遺構・遺物が検出されているのは、和田岩坪遺跡の東側約500mに位置する和田遺跡、北東側約500mに位置する神前遺跡である。和田岩坪遺跡と同様の立地にある和田遺跡では、遺構の検出面がT.P.=0.8～1.0mとなり、和田岩坪遺跡での遺構の検出面T.P.=0.9m前後と大差ない。神前遺跡では、岩橋山塊の西端に位置する半独立丘

陵的な福飯ヶ峯（標高約 102 m）の北西側の丘陵裾部から沖積平野部に立地することから遺構の検出面は T.P.=2.0 m 前後から和田川に向かって下降する南側では T.P.=1.30 m 前後となる。和田岩坪遺跡や和田遺跡より遺構の検出面が高くなり、より安定した立地に生活域を形成していたものと考えられる。このように、従来の地理的な理解では低湿なラグーン性低地という生活域ではあるが、弥生時代前期の段階で和田岩坪遺跡から和田遺跡一帯に人々の営みが開始されたことが明らかとなってきた意義は重要である。



図 2 和田岩坪遺跡の調査遺構全体図



写真 1 自然流路内の篩状遺構



写真 2 下層の自然流路から出土した弥生土器

弥生時代集落の南端の様子

—和歌山市 太田・黒田遺跡の第90次調査—

公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団 菊井佳弥

1. はじめに

太田・黒田遺跡は、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡であり、弥生時代前期から中期の和歌山県内屈指の大規模集落遺跡として知られる。紀ノ川の旧流路である大門川・和歌川が遺跡の北側、西側を大きく取り囲む標高4.0m前後の沖積氾濫原に立地する。遺跡の南東が高く、北西方向へ低くなる。東西約500m、南北約850mの範囲で、現在までに約100次の調査がおこなわれている。第90次調査は和歌山市太田4丁目で水素ステーション建設に伴っておこなわれ、2018年10月9日から2019年1月16日まで340㎡を調査した。

2. 調査成果

第90次調査地は、太田・黒田の弥生時代前期から中期の集落の南端に位置し、本調査では、幅約5m、深さ約2mと幅約5m、約1.5mの大溝2条を検出した。これらの溝は環濠といわれている第67・45・26次調査で検出された南東-北西方向の大溝と平行する。南側の溝は第67・45・26次調査の大溝の埋没時期にあたる弥生時代中期初頭に、先の大溝の代替としてより外側にやや規模を大きくして掘削されていた。北側の溝は南側の溝にやや遅れて掘削され、これらの溝は幾度と掘り直され、弥生時代中期後半まで機能していた。これらの溝を北西に延長した第78次調査では、同一遺構と考える同時期の大溝が検出されている。

大溝埋没後には、弥生時代中期後半の周溝墓の可能性のある途切れる溝を検出しており、土器棺が検出されている秋月遺跡第10・16次調査の成果を踏まえて、墓域であり、大溝掘削以前には、弥生時代前期から中期前半?の水田が検出でき、生産域であった。遺跡西側であきらかになっている土地利用の変化が遺跡南側でも見られることがわかった。

弥生時代の集落や生産域ができる前の縄文時代晩期には木の根痕が検出されたことから、林を形成していた可能性もあることがわかった。

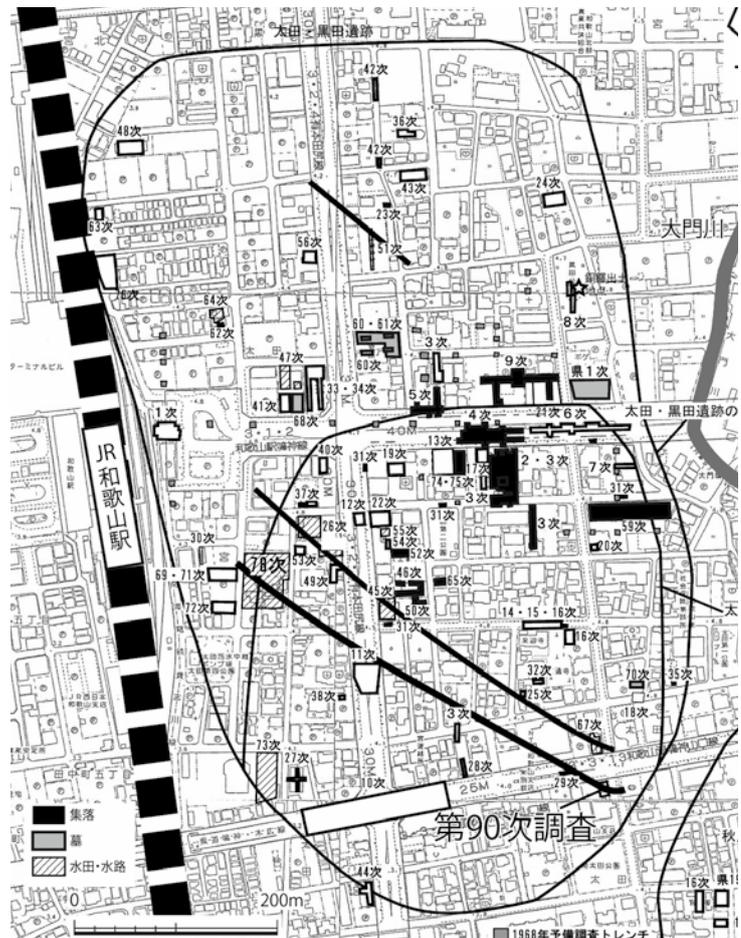


図1 太田・黒田遺跡既往調査位置図



写真1 周溝墓の可能性ある弥生時代中期後葉の溝



写真2 周溝墓の可能性ある溝から出土した土器



写真3 縄文時代晩期の木の根痕



写真4 環濠とされる67・45・26次調査の大溝に平行する大溝

紀ノ川北岸の古代の用水路

—和歌山市 田屋遺跡の発掘調査—

公益財団法人和歌山県文化財センター 森田真由香

1. はじめに

田屋遺跡は、紀ノ川北岸の和歌山市田屋・小豆島周辺の沖積地に広がる遺跡である。この遺跡は主に弥生時代～古墳時代の集落遺跡であり、遺跡内各所で竪穴建物が複数棟確認されている。今回の調査は県道紀伊停車場田井ノ瀬線の道路工事に伴い平成27年度から行ってきたものの第3次調査であり、平成31年1月から2月にかけて786.6㎡を対象に行った。今回の調査地は田屋遺跡の北東部にあたり、調査地のすぐ北には六箇井用水が東から西へ延びている。



図1 田屋遺跡と周辺の遺跡



写真1 遺跡遠景（北から） 写真上が紀ノ川

2. 調査の成果

今回の調査では、調査地北側を3-1区・南側を3-2区とした。遺構面は1面であり、主に奈良時代～平安時代の遺構を検出した。

3-1区の北側で東西に延びる33溝は、幅3m、残存する深さ1.7mを測る。33溝からは7世紀～8世紀の須恵器蓋・須恵器甕・土師器の移動式カマドなどが出土した。

3-1区西部では方形竪穴状遺構と掘立柱建物を検出した。方形竪穴状遺構の一部と掘立柱建物、3-2区東部から北西方向へ延びる溝が重複しているが、重複関係から溝→方形竪穴状遺構→掘立柱建物の順に形成されたとみられる。掘立柱建物は1間×2間で、桁行・梁行の間尺はそれぞれ2.6mである。主軸は33

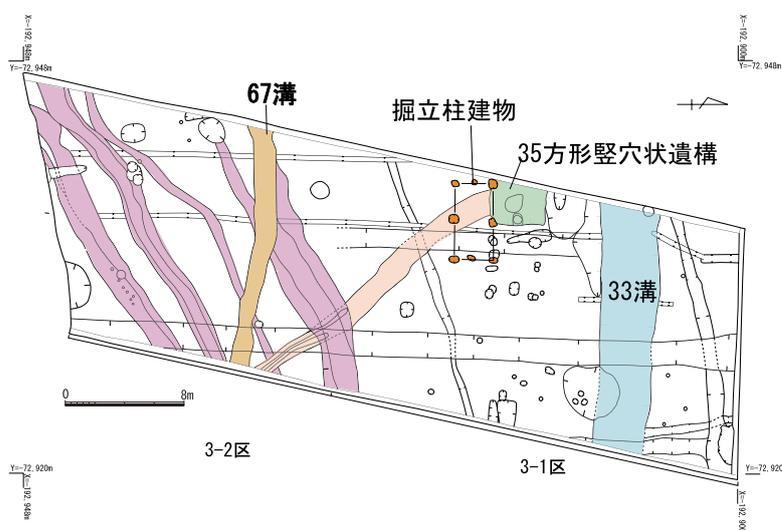


図2 第3次調査の検出土遺構全体図

溝と平行な東西方向であり、梁側には東柱とみられる柱穴を伴う。

3-2区では、東西方向に延びる溝を複数検出した。3-2区で検出した溝は自然地形に沿って北東から南西へ延び、重複関係からこれらより後出する67溝はほぼ東から西へ延びる。67溝からは須恵器蓋・須恵器杯・土師器鍋・須恵器のミニチュア壺の他、赤く焼成が不十分な須恵器が出土した。なお、67溝から出土した遺物の年代は8世紀に集中している。



写真2 方形竪穴状遺構（東から）



写真3 掘立柱建物（南から）

3. まとめ

今回の調査からは、現在情報の少ない古代における田屋遺跡北東部の様相を窺うことができる。検出遺構のうち33溝は、その規模から古代の主要水路であった可能性がある。検出した溝をはじめとする今回の調査成果は、古代の田屋遺跡、とりわけ当時の土地開発を考える上で重要な手がかりになると予想される。今後、地形や当時の地域政策など複数の視点からこの遺跡を検討する必要がある。



写真4 第3次調査全景（真上上空から：右側が北 モザイク写真） 写真右が現在の六箇井用水

奈良時代の集落跡

— 紀の川市 岡田Ⅱ遺跡の発掘調査 —

紀の川市教育委員会 森原 聖

1. はじめに

岡田Ⅱ遺跡は、紀ノ川から北へ約0.5km地点の河岸段丘上に立地する弥生時代から中世にかけての遺物散布地である。その範囲は、紀の川市下井阪から岩出市岡田までの東西約1km、南北約0.5kmとされる。遺跡の北側には、和泉山脈から春日川が北東から南西方向に流れ、紀ノ川へ注いでいる。周辺の遺跡では、遺跡の東側平野部に八幡塚古墳や三味塚古墳など古墳が集中して築かれ、一方、春日川を挟んだ北側には、紀伊国分寺跡や西国分廃寺などの寺院跡や、西国分Ⅱ遺跡や岡田遺跡といった官衙的な様相をもつ遺跡が集中しており、古代の拠点的な場所であったことが窺える。

紀の川市による既往の調査では、4次にわたる確認調査や多くの立会調査が実施されているが、遺跡の面積からすると調査面積は僅かである。調査により、遺跡の中央付近から西側で弥生時代から古墳時代の遺構や遺物が確認され、中世になるとその範囲は東側に広がりを見せる傾向にある。

2. 調査成果

今回の調査は、遺跡の中央付近で計画された宅地造成に伴う発掘調査である。調査区は、確認調査に伴うトレンチの他、道路建設箇所及び敷地周囲の擁壁工事箇所を対象とした。

調査の結果、奈良時代と考えられる複数のピットや調査区を斜めに延びる溝が検出された。検出されたピットには小型で円形のものや、やや大型の隅丸方形のものがある。これらは溝より南側で多く検出されている。溝は北東から南西方向に延長し、規模は幅1.3m程度、深さ約1mである。断面形状はV字状で直線的に延長しているため、人為的に

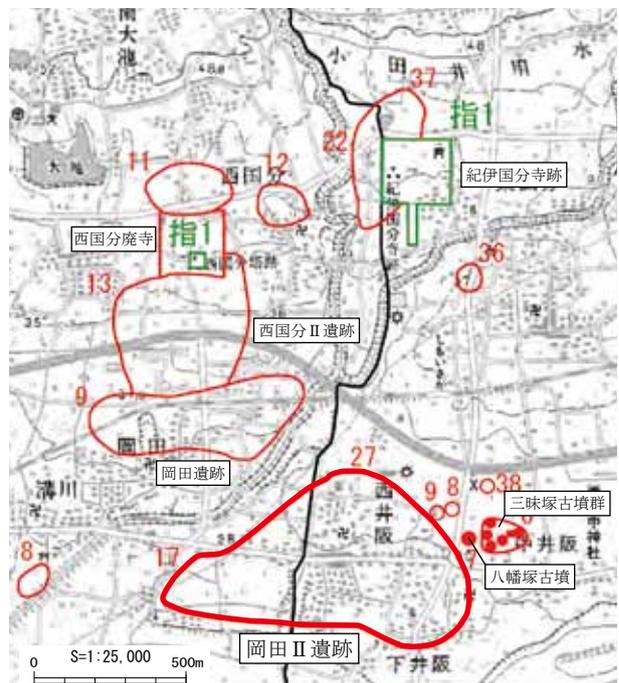


図1 岡田Ⅱ遺跡と周辺の遺跡



図2 岡田Ⅱ遺跡の既往の調査

掘削されたと考えられる。出土遺物には土師器や須恵器、移動式竈片など多数出土している。また、複数の遺構から鞆の羽口や鉄滓が出土している。

3. まとめ

調査地の南西端では掘立柱建物跡の可能性のある柱列が検出された。その他、柱痕のある柱穴が多数検出されており、複数の建物等の存在が推測される。出土遺物には器類の他に、金属製品の生産が想定されるものもある。調査結果から、古代の拠点的な場所であった当地域において、同時期の遺構の広がりが見られた。他の遺跡との関連性や違いを考慮し、当時の様相を想像することが必要である。その他、調査地の包含層からは多数の弥生土器も出土しており、弥生時代の遺構の広がりが推測される。各時代の痕跡により、この地域が生活に適した安定した場所であったことがわかる。



図3 調査区平面図



写真1 中央調査区 北半 南から



写真2 中央調査区 南半 南から



写真3 溝断面 北東から



写真4 調査地南西端 柱列 北から

古代の寺院と佐波理鏡蓋

— 伊都郡かつらぎ町 佐野寺跡の整備 —

かつらぎ町教育委員会 和田大作

1. 佐野寺跡の位置と発掘調査

佐野寺跡は、伊都郡かつらぎ町大字佐野字塔壇 540 番 1 他に所在し、和泉山脈南麓の低位段丘上において、紀の川支流である西谷川の土砂堆積によって形成された扇状地に立地する古代寺院跡である。町域には古代の遺跡が多く、とくに町域東部地域は、丁ノ町・妙寺遺跡で墨書土器が出土し、西飯降Ⅱ遺跡では円面硯が出土したことから、伊都郡衙に関係する可能性がある。また、町域西部地域は、背山が大化改新詔による畿内南限「紀伊兄山」とされ、隣接する大字萩原が萩原駅に比定されている。伊都郡衙、萩原駅、佐野寺跡、背山の麓を南海道が結び、東西走していた景観が想起され、町域とくに紀の川北岸の段丘上は交通の要衝であったと考えられる。

佐野寺跡の発掘調査等については、昭和 50 年度における町道建設の際の緊急調査、昭和 52 年度以降の開発に伴う発掘調査、平成 25 年度以降の整備事業に伴う確認調査が行われてきた。その結果、川原寺式・本薬師寺式・巨勢寺式の軒瓦を含む瓦類のほか埴仏や風招、佐波理鏡蓋が出土するとともに、金堂跡、講堂跡、木製基壇をもつ塔跡、六角経蔵跡、木製灯籠跡、東西溝、南門雨落溝、掘立柱建物群が検出され、北の掘立柱建物群を坊舎区域、南を主要伽藍とする東西 79m・南北約 114m の寺域を有する飛鳥時代後期の寺院跡であることがわかっている。とくに、木製基壇は難波宮跡、近江国庁跡、三河国分寺跡等、中央の施設あるいは中央との関係が濃いと考えられる施設に採用されていることが多く、注目される。

このように、佐野寺跡は、伽藍配置が確認されているとともに寺域や造営時期が判明しており、『日本霊異記』の「狭屋寺」に比定されるなど、和歌山県の古代史を考える上で重要な寺院跡で、全県的にも貴重であることが顕著である。このことから土地所有者の同意が得られた塔跡・金堂跡の一部が和歌山県指定文化財（史跡）に指定され、継続的な普及啓発を経て、保存・活用への要望の高まりを契機として整備に至った。

2. 整備

整備事業は、事前調査（礎石の可能性のある大石の調査）を平成 24 年度に行ない、平成 25 年度からは整備委員会をたちあげ、整備のための確認調査を開始した。平成 26 年度に発掘調査を終了し、整備工事については平成 28 年度以降、「佐野寺跡史跡整備事業」として県補助事業（和歌山県文化財保護費補助金）を活用した。

整備工事は、県文化財指定・公有化できた範囲内において、塔跡については木製基壇の復元を、金堂跡については張芝表示を行った。また、周辺の遺跡に関する情報、佐波理等を含む重要遺物・六角形掘立柱建物を含む重要遺構・伽藍全体の配置等既往の調査成果による情報、これらをもとにした伽藍全体のイメージ図を掲載した案内板を設置した。さらに、復元・表示施設の前にはそれぞれの遺構を説明する説明板を設置した。出入口を東と北に設置し、東側には標柱を立てた。園路内は歩きやすいダスト舗装とした。境界は高上げによって明示し、周辺との比高が大きい西

側中央付近から南側には転落防止柵を設置し、必要に応じ目隠し塀とした。休憩施設としては、ベンチを設置した。近傍には修景の為のサザンカを植栽し、維持管理用に散水栓を設置した。

3. 佐波理鏡蓋について

佐野寺跡では、瓦類のほか、埴仏や風招、佐波理鏡蓋など貴重な遺物が出土している。今回は、そのうち佐波理鏡蓋について紹介する。

佐波理は、銅を主体として錫、鉛あるいは銀を加えた黄白色の合金を用いた金属製品を指し、鏡のほか匙が確認されている。正倉院には加盤（かさね鏡）が伝わっており、新羅文書の反故紙が包装に使用されていることから、正倉院例は新羅製であることがわかっている。

佐野寺跡例は、鏡蓋である。鏡身は兵庫県神戸市上沢遺跡や奈良県橿原市藤原宮・京跡で数例出土しているが、鏡蓋は管見では本例以外に確認できない。口径 11.2cm、器高 3.5cm を測り、天井部に輪状つまみを有する。出土例自体が少ないため時期判断は難しいが、須恵器編年を参考にすれば、輪状つまみ及び器高から、奈良時代でも初期あるいは飛鳥時代に遡る可能性も考えたい。国産・舶来の別については、含有金属の具体的な比率を求めたいところだが、現状では未分析である。ただし、含有金属の構成は判明しており、高錫銅製品であることは間違いなし（表1）。

いずれにしても、このような貴重品をもつ「狭屋寺」は、木製基壇の存在とともに、中央との関係が色濃いものと考えられ、今後さらなる調査が期待されるところである。



写真1 県史跡部分整備後状況

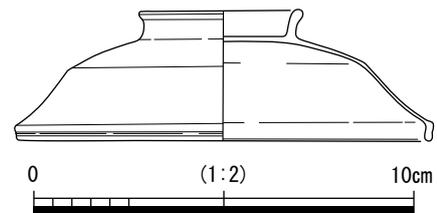


図1 出土佐波理鏡蓋

表1 「佐波理鏡蓋」各部の蛍光X線検出強度

元素	ライン	金属残存部 [cps]			補填されたとと思われる部分 [cps]				ROI [keV]	
		a	d	e	b	c	f	g		
20	Ca カルシウム	K α	-	-	-	671.190	281.478	4.346	9.213	3.54- 3.84
22	Ti チタン	K α	-	-	-	2435.731	683.379	5.597	15.324	4.35- 4.67
24	Cr クロム	K α	-	-	-	2650.554	1019.761	19.135	31.667	5.25- 5.58
26	Fe 鉄	K α	1636.932	3567.379	63.992	4616.674	2230.966	18.292	53.144	6.23- 6.57
29	Cu 銅	K α	104456.930	68043.306	175.667	1834.990	797.157	13.794	11.765	7.86- 8.23
30	Zn 亜鉛	K α	-	-	-	3327.427	1305.001	29.430	40.769	8.44- 8.82
33	As ヒ素	K β	720.801	1328.720	3.585	-	-	-	-	11.52-11.93
47	Ag 銀	K α	437.240	1247.579	3.149	-	-	-	-	21.84-22.37
50	Sn スズ	K α	7176.454	18137.952	51.215	-	-	-	-	24.91-25.47
82	Pb 鉛	L β	3135.136	8011.271	22.262	25352.813	9098.414	223.033	422.557	12.41-12.84

明らかとなった湯浅党の本拠

— 有田郡湯浅町 湯浅城跡の発掘調査 —

湯浅町教育委員会 山本隆重
和歌山県教育委員会 仲辻慧大

1. 湯浅城跡とは

湯浅城跡は、湯浅町の東部、標高77.6mの青木山に築かれた中世の山城跡です。中世前半に紀伊国を代表する武士団を形成した湯浅氏一族(湯浅党)の本拠であったと考えられ、周知の埋蔵文化財包蔵地となっています。丘陵最高所に主郭が設けられ、その西、東、南方向にのびる尾根上に、複数の平坦な面である曲輪が展開しています。主郭周辺には防御のための土塁や堀切がみられ、丘陵北側の斜面が特に険しいことから、北側への防御を意識していることがうかがえます。また、丘陵南側には山田川が流れていることから、要塞を築くにふさわしい場所を選地しているといえます。

2. 調査の経緯

湯浅町では、有田市・有田川町と連携して、湯浅城跡をはじめとした湯浅党関連の中世城郭の今後の保存を図るべく、有田郡市中世城郭調査指導委員会の指導のもと平成28年度から調査を進めています。平成29年度には城跡の詳細な現況を把握するため、航空レーザ測量を実施し、丘陵の最高所にある主郭部分をはじめとした曲輪や土塁などの状況が明らかとなりました。その成果を踏まえ、平成30年度には城跡の利用開始時期と地下の内容を把握することを目的とした発掘調査を実施しました。調査は、和歌山県教育委員会に指導を依頼し、公益財団法人和歌山県文化財センターの支援を受けて行いました。

3. 調査の成果

今回の発掘調査では下図のとおり、3か所の調査区を設けました。1区は主郭の南東にある平坦面に、2区は主郭と東側の曲輪に間に設けられた堀切に、3区は主郭東側の曲輪上に設定しました。

1区 これまで、1区を設定した平坦面については、城跡に伴う曲輪と考える見解や近代に開墾された場所だとする考えがありました。今回の調査で土層を1層ずつ確認した結果、上から順に、表土及び耕作土の第1層、近世と中世の土器を含む第2層、中世半ばから後半の土器を含む第3層、

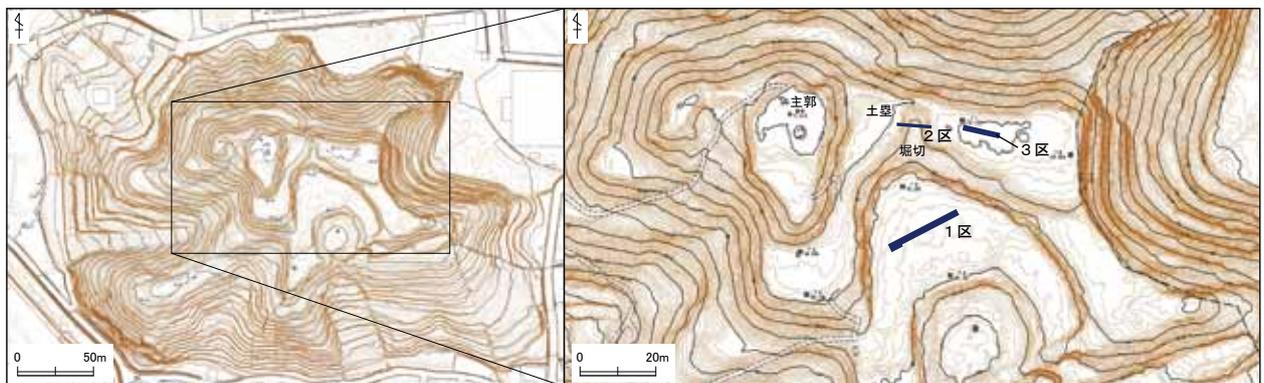


図1 湯浅城跡測量図 (S=1/5000) 及びトレンチ配置図 (S=1/2000)

中世前半の土器を含む第4層、上面に焼土がひろがり、中世前半の土器を含む第5層、岩盤の上に整地された第6層、そして岩盤である第7層を確認することができ、この平坦面の利用が中世前半にさかのぼることが分かりました。

中世前半段階の遺構として、西側で建物の礎石を6か所で検出しました。礎石は据えられている遺構面から判断して4時期に分けることができ、鎌倉時代から繰り返して屋敷の建て替えと整地が行われていたことが分かりました。その間には焼土がひろがる面もありました。出土した遺物には土師器、東播系須恵器、備前焼、風炉、中国産の青磁、鍛冶に伴う鉄滓などがあります。このことから、1区を設定した平坦面が、青磁や風炉などの貴重な土器を入手できる人物が利用していたことがうかがえます。

2区 2区は堀切の構造を確認するとともに、堆積した遺物を収集することを目的に設定しました。表土を除去したところ、岩盤が露出している状況が明らかとなり、堀切が岩盤を穿て設けたことが分かりました。また、底部分には、上から流れてきた焼土が堆積しており、焼土には中世段階の遺物が含まれていました。

3区 3区は主郭東側にひろがる平坦面の状況を確認するために設定しました。表土及び中世から近世の土器を含む第2層が厚く堆積しており、その下から平らな岩盤面が見つかりました。1区のように遺構が多数集中するような利用はされなかったことが分かりました。

4. まとめ

これまで、湯浅城跡については、利用開始時期や構造の点で不明点がありましたが、今回の調査の結果、湯浅氏が活躍した中世前半（鎌倉時代）の段階から、屋敷の建て替えや整地が繰り返されていたことが分かりました。このことは、湯浅氏の動向を考えるうえで貴重な調査成果であるといえます。



写真1 1区 焼土面と礎石（北東から）



写真2 2区 堀切と焼土（東から）



写真3 3区 岩盤面（西から）

湯川氏一族発祥の地

— 田辺市 道湯川集落跡の発掘調査 —

和歌山県立紀伊風土記の丘 金澤 舞

1. はじめに

和歌山県が計画した熊野古道見どころ整備事業の一環として、田辺市中辺路町道湯川に所在する道湯川集落跡の発掘調査等を行った。道湯川集落跡は、室町時代に日高郡で勢力を誇った湯川氏一族発祥の地として知られ、集落中心部中央を熊野古道中辺路並びに大瀬川が東西にはしる谷間の集落である。文献史料によると、建仁元年(1201)10月に後鳥羽上皇の参詣に随行した藤原定家の日記『後鳥羽上皇熊野御幸記』には「湯河宿所」とみえ、承元4年(1210)5月に修明門院の参詣に随行した藤原頼資の日記『修明門院熊野御幸記』には、この周辺で休憩をとるなどしたことが記されている。また、応永34年(1427)9月に足利義満の側室北野殿が参詣した折には、「奥の湯川」を称する豪族が歓待したと記されるなど、少なくとも鎌倉時代には人々が住み、室町時代には貴族らの宿場や休憩所として繁栄したことがうかがえる。その後の江戸時代寛政10年(1798)の林信章著『熊野詣紀行』にも、「人家多く宿茶屋あり」とあり、江戸時代にも引き続き人々が住み、また参詣者らが行きかっていたが、昭和31年(1956)に最後の住人が退村し、廃村となった。



図1 道湯川集落跡発掘調査地位置図

2. 調査の成果

今回の発掘調査は、大瀬川北側の道湯川集落中央に位置する微高地上の石垣に囲まれた屋敷地跡で行った。調査の結果、鎌倉時代から室町・安土桃山時代に建てられたとみられる掘立柱建物跡や近現代の礎石建物跡、その他、時期不明の土坑やピット、鋤溝等多くの遺構が確認された。

調査成果の中で最も注目されるのは、中世の掘立柱建物跡である。この掘立柱建物跡は、規模が桁行5間(約14.0m)、梁行2間(約5.3m)と比較的大きい。柱穴平面形は、直径0.2~0.3mの円形を基本としつつも、やや歪な形状で、建物の柱には未製材の円柱木を使い、なかには湾曲した材も使われたものと推測される。屋根は、出土遺物に瓦が全く確認されなかったことから、樹木の皮を使った杉皮葺等であったと考えられる。遺物は、検出した遺構や調査地周辺から鎌倉時代の山茶碗皿や室町時代の中国製青磁、室町時代から江戸時代の土師器皿、江戸時代の陶磁器などが出土した。この掘立柱建物跡は、その規模や周辺地で中国製青磁が出土することなどから、室町時代の文献史料にみられる貴族らが利用した宿場や休憩所に関わる建物跡の可能性が考えられる。

現在でも、熊野古道中辺路を歩き、道湯川集落に至れば、石垣に囲まれた屋敷跡のほかに、「湯川氏一族の墓」とされる墓域、「伝湯川氏城館跡」とされる堀切をもつ丘陵上の平坦地や湯川氏一族の氏神として祀られる「湯川王子」などをみることができる。中世にも同様の集落構成であったかは定かではないが、湯川氏一族の墓には、中世にさかのぼる五輪塔などが残るなど、現在でも豪族湯川氏一族を生み出した集落の一端を垣間みることができる。

↑ 熊野古道 (中辺路)

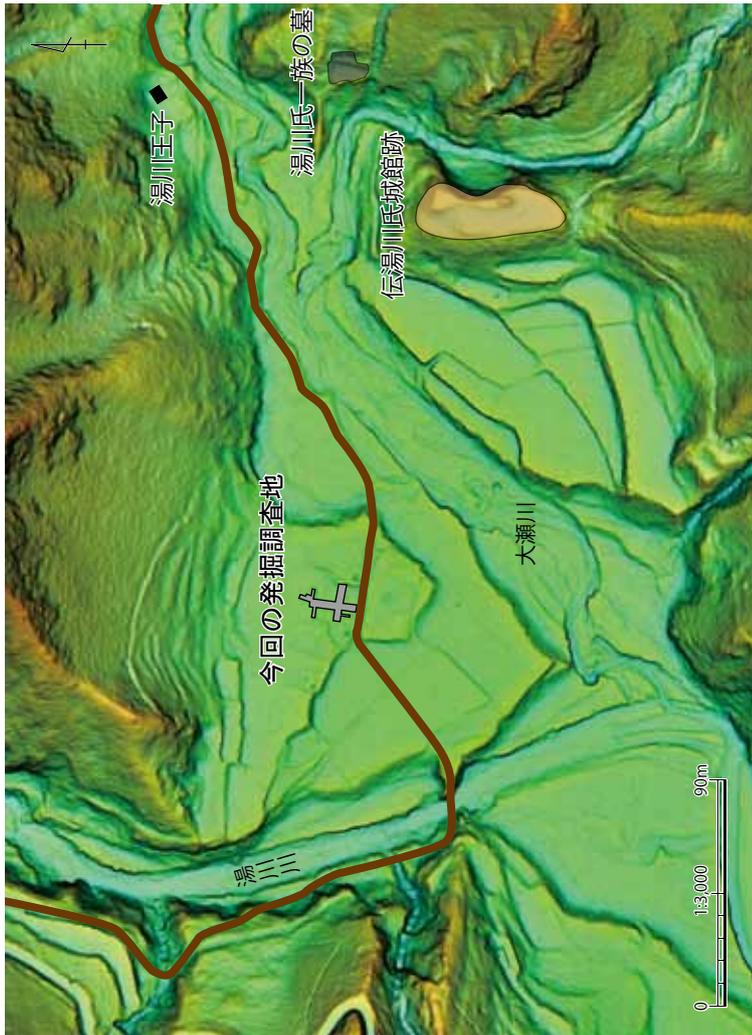


図2 道湯川集落跡中心部



写真1 調査区全景 (南から)



写真2 調査区全景 (西から)



写真3 柱穴跡全景 (西から)

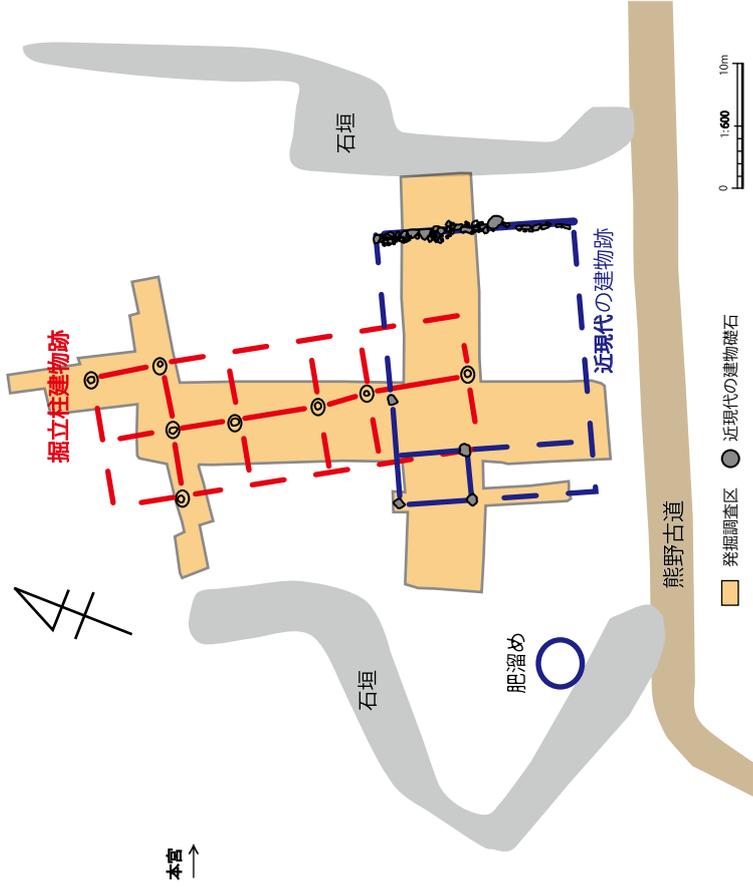


図3 発掘調査区周辺模式図

鈴木姓のふるさと

— 海南市 鈴木屋敷（藤白王子跡）の整備に伴う発掘調査 —

海南市教育委員会 矢倉嘉人

1. 藤白王子跡と鈴木屋敷

藤白王子は、現在の藤白神社の境内地にあった王子社で、熊野九十九王子の中でも、格式が高いとされる五体王子の一つとされ、歴代上皇らの熊野御幸の際には、神前で御経供養や神楽・相撲が奉納された。平成 27 年 10 月には、「藤白坂」・「藤白王子跡」・「藤代塔下王子跡」・「一壺王子跡」（海南市）、「糸我峠」（有田市）、「鹿ヶ瀬王子」・「河瀬王子跡」（広川町）と共に国指定史跡「熊野参詣道」に「紀伊路」として追加指定された。

鈴木屋敷は藤白神社境内の東約 130 m に位置し、藤白鈴木氏は平安時代後期に熊野よりこの地に移り、藤白王子を拠点に全国への熊野信仰普及に大きな役割を果たしたとされる。敷地内には、江戸時代の末に建てられた座敷と、その後に建て替えられた建物（北棟・北北棟・下屋棟）、などがあり、座敷の西側には池泉庭園がある。しかし、建物、庭園いずれも経年劣化により傷みが進行しており、特に座敷棟は倒壊の危険が高まっていた。そこで、所有者である藤白神社が中心となり平成 30 年度より整備事業に着手し、平成 30 年度は建物の解体調査及び発掘調査を実施した。

2. 鈴木屋敷の発掘調査

鈴木屋敷の発掘調査は平成 30 年 7 月より平成 31 年 3 月までの間、建物の解体に合わせて随時実施した。

江戸時代の末に建てられた座敷棟は、虫害や経年劣化により屋根の大部分が崩落しており、崩落した屋根瓦、屋根材を撤去し、礎石の確認をおこなった。



図1 鈴木屋敷現況図

玄関棟は、座敷棟と北棟の間にあった建物で、平成7年頃に暴風のため倒壊し、建物跡は土に埋もれ、調査前は通路となっていた。調査により礎石を確認したほか、玄関部分の構造が明らかになった。また、西側の座敷棟との間で、便所跡と考えられる埋鉢を2個体検出した。2個体とも徳島県の大谷焼で、時期は大正から昭和初期と考えられる。



写真1 座敷棟



写真2 玄関棟

北棟は近年大きく改造を受けていたが、現存建物範囲の東側に約2間程度延びる石列が検出され、前身建物の規模を推定することができた。北北棟では、北棟同様、近年に大きく改変されている建物と考えられていたが、建物の解体調査の結果、座敷棟同様に江戸時代の終わり頃まで遡る可能性が高いことが判明した。

敷地東側の門跡の調査では、石敷遺構、瓦敷遺構、礎石と考えられる石を検出した。石敷遺構は5cmからこぶし大程度の石が用いられている。南側はかく乱を受けており、そのかく乱の下層より瓦敷遺構を検出した。瓦は主に平瓦を用いており、概ね江戸時代後期以降と考えられる。



写真3 北棟



写真4 門跡

3. まとめ

今回の発掘調査の実施により、鈴木屋敷の復元に向け重要な資料を得ることができた、これらの調査成果に基づき、整備をおこない、令和3年頃の完成を目指している。整備完成後は、藤白王子跡や鈴木屋敷についての理解を深めるガイダンス施設として、熊野参詣道を歩くウォーカーの休憩施設として、そして、全国の鈴木姓の「ふるさと」として、多くの方々が訪れる場所となる事が期待される。

和歌山城西の丸 能舞台の発掘

— 和歌山市 史跡和歌山城の第40次発掘調査 —

和歌山市 大木 要

1. はじめに

和歌山市では平成30年度から3カ年計画で西の丸能舞台に関する発掘調査を予定している。能舞台は西の丸の東側に位置し、明暦の大火（1655年）以降に常設の能舞台があったとされている。能舞台や附属施設の位置は、「和歌山城御城内総御図」など江戸時代の絵図である程度想定できるが、正確な位置や規模などの詳細については明らかになっていない。昨年実施した調査はその1年目で、能舞台の想定範囲を横断する形で東西（2-1区）、および能舞台想定地の四隅（2-2～5区）に調査区を設定し、遺構の有無を確認した（図1・2）。

2. 調査成果

調査の結果、能舞台に関連する埋甕などの反響施設や絵図にある階段・石畳などは確認できなかったものの（2-1区）、能舞台に関連する可能性のある礎石の根石（2-2・3・5区、写真②～④）、能舞台の周囲をめぐる磚敷の石組水路（2-2・3・5区、写真④）を確認した。石組水路は、2-3区で東側に屈曲し内堀まで続いている。また、2-5区では石組水路の前面に玉石がまとまって見つかっており（写真②）、能舞台の前には玉石（白洲）が敷かれていたことが明らかになった。

見つかった柱痕跡と「和歌山城西の丸絵図」を重ね合わせたものが図2である。それによると、2-2区の2基の根石のうち北側が脇柱、南側は脇座の礎石、2-3区の2基の根石のうち北側が笛柱、南側が舞台から楽屋へ抜ける廊下の基礎、2-5区の根石は目附柱に対応できる。

これらの柱により能舞台を復元すると間口5.2m、奥行4.8mとなり、舞台の基本的な大きさとされる間口約5.1m、奥行5.7mと比べると奥行きが短い形状をしている。

今後の調査により、和歌山城西の丸の能舞台の様子がさらに明らかにされることが期待される。

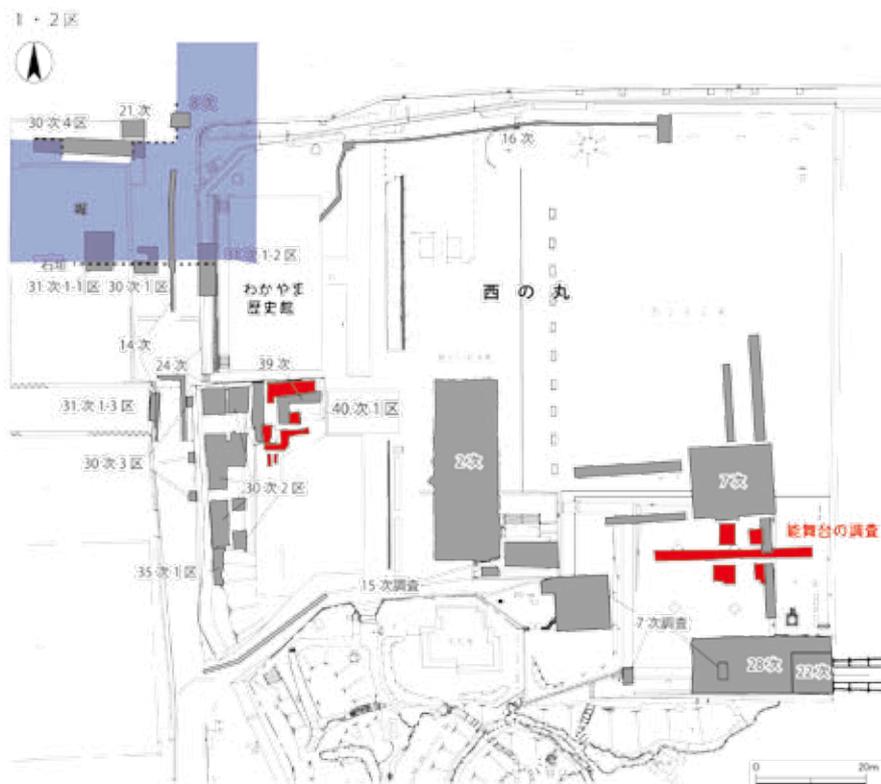


図1 調査地

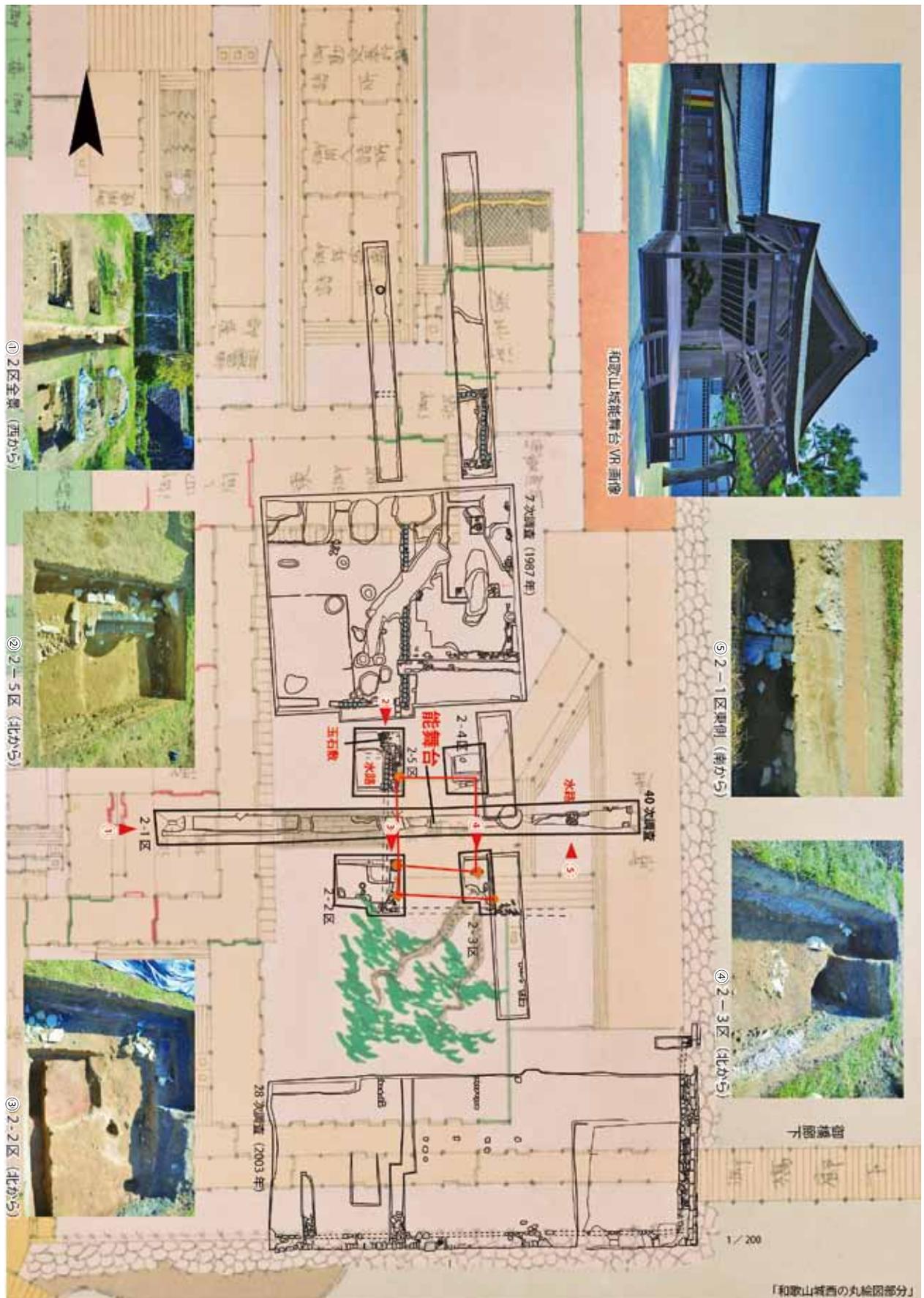


図2 能舞台の発掘調査成果と「和歌山城西の丸絵図」

高野山における納骨信仰霊場の範囲について

— 伊都郡高野町 金剛峯寺遺跡の分布調査 —

高野山霊宝館 鳥羽正剛

1. 高野山の地理的環境

高野山は紀伊山地北部の標高約 800 m の盆地に位置し、その周囲は標高約 1,000 m を超える峯々に囲まれている。信仰上、その地形は蓮華に喩えられ周囲の外輪山を「外八葉」、その内側の内輪山を「内八葉」といい、高野山が清浄な場所、つまり「聖地」であることを意味している。

高野山には古代から近世にいたるまで、全山の様子を描いた古絵図が数多く残されている。その中の『高野全山絵図』（承応 2 年〈1653〉金剛峯寺蔵）には、空海（弘法大師）が入定する奥之院御廟、またその周囲には外八葉のうち、「てんじくざん 転軸山」、「ようりゅうざん 楊柳山」、「まにざん 摩尼山」が描かれている（図 1）。これらの峯々は「こうやさんざん 高野三山」と呼ばれ、高野山の古絵図にはおおよそ描かれる重要な山となっている。さらに外八葉の峯々には、7カ所の女人堂を結ぶ巡礼道「じょにんみち 女人道」が巡っている。

2. 五輪塔の分布

高野山で五輪塔が祀られているところ、つまり墓地のあるところと言えば、まず奥之院地区が挙げられるが、『高野山壇上寺家絵図』（宝永 3 年〈1707〉金剛峯寺蔵）など、いくつかの古絵図には、奥之院地区以外の子院地区の安養院や蓮華定院などに墓地が描かれており（図 2・3）、そのいくつかは現存している（図 4・5）。また、子院地区での発掘調査でも、かつて存在した子院境内地から火災のため廃棄された中世の一石五輪塔などの石塔が多数出土し墓地の存在が窺える（図 6）。

先述の『高野全山絵図』には、女人道が巡る転軸山と楊柳山の山頂部に五輪塔、摩尼山の山頂部に建物が描かれ（図 7～9）、その他の古絵図にも五輪塔や建物が確認できる（表 1）。実際に女人道の分布調査を行うと、高野三山の山頂部や沿道にも山内で見られるような一石五輪塔などの石造物が散見される（図 10～15）。これらの古絵図の描かれた年代から十七世紀半ばには、高野三山の山頂部には既に五輪塔が祀られていたことが推定される。

3. 納骨信仰の霊場—高野山

高野山に分布するこれらの五輪塔などの石造物は空海を慕い、遺骨や髪、歯など、身体の一部を伴って、生前や死後に高野山の地に石造物と身体の一部を納めるといふ弘法大師信仰の一つ、納骨信仰に伴って奉安された。

分布調査では石造物の分布は、高野三山の山頂部や女人道沿いにも認められることから、納骨信仰における聖地の範囲は奥之院地区だけではなく、かつては子院地区、さらにその広がりには女人道をおおむね境界とし、高野山全体が聖地や浄土として認識されていたことが判明した（図 16）。

【参考文献】

- ・『高野町文化財調査報告書第 2 集 金剛峯寺遺跡 大乘院跡駐車場整備事業に伴う発掘調査報告書』 2007.3 高野町教育委員会
- ・鳥羽正剛 「古絵図で巡る高野山探訪（その九）」『霊宝館だより』第 129 号 2019.2 （公財）高野山文化財保存会・高野山霊宝館
- ・鳥羽正剛 「古絵図で巡る高野山探訪（その十）」『霊宝館だより』第 130 号 2019.4 （公財）高野山文化財保存会・高野山霊宝館



【キャプション一覧】

- 図1 『高野全山絵図』承応2年(1653) 金剛峯寺蔵
- 図2 『高野山壇上寺家絵図』(安養院部分) 宝永3年(1707) 金剛峯寺蔵
- 図3 『高野山壇上寺家絵図』(蓮華定院部分) 宝永3年(1707) 金剛峯寺蔵
- 図4 安養院境内墓地(毛利氏)
- 図5 蓮華定院境内墓地(真田氏)
- 図6 金剛峯寺遺跡 大乘院跡検出の一石五輪塔出土状況(写真:高野町教育委員会提供)
- 図7 『高野三山絵図』(転軸山山頂部分)
- 図8 『高野三山絵図』(楊柳山山頂部分)
- 図9 『高野三山絵図』(摩尼山山頂部分)
- 図10 転軸山山頂の祠
- 図11 楊柳山山頂の祠
- 図12 摩尼山山頂の祠
- 図13 転軸山山頂祠脇の一石五輪塔
- 図14 楊柳山山頂祠前の五輪塔水輪
- 図15 摩尼山山頂祠内の一石五輪塔

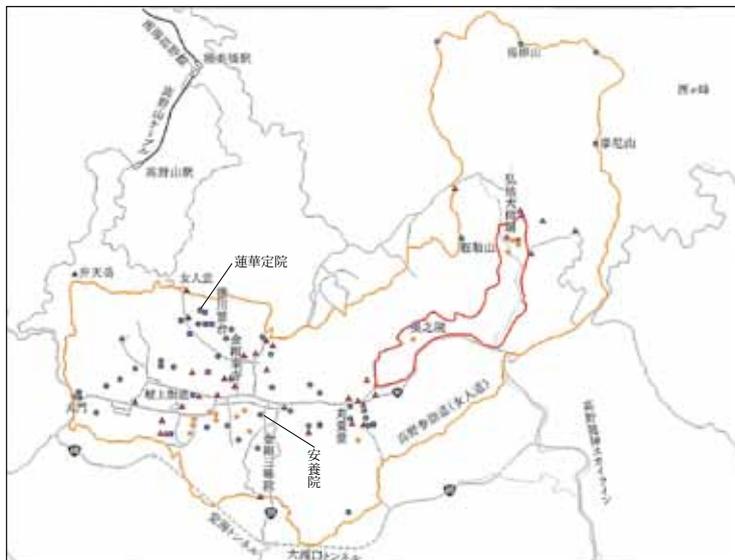


図16 高野山内の墓地・墓・石造物分布図

古絵図名称	年代	転軸山	楊柳山	摩尼山
『高野全山図(御公儀上一山図)』	正保3年(1647)	五輪塔	五輪塔	建物
『高野全山絵図』	承応2年(1653)	五輪塔	五輪塔	建物
『高野全山絵図(高野山絵図)』	万治元年(1658)	なし	五輪塔	建物
『奥院絵図』	宝永4年(1707)	建物	五輪塔	五輪塔
『高野山奥院総絵図』	寛政5年(1793)	建物	不明	建物

表1 古絵図にみる高野三山山頂の建物・石造物一覧

〔凡例〕

- …高野山女人道
- …奥之院墓地
- ◎…青白磁納骨器出土地点
- …廟所
- …子院墓地
- ▲…石造物出土・集積地点
- ★…石造物が出土した発掘・立会調査地

地宝のひびき

—和歌山県内文化財調査報告会—
報告資料集

発行日 令和元（2019）年7月13日
発 行 公益財団法人和歌山県文化財センター
〒640-8301 和歌山市岩橋 1263 番地の1
TEL：073-472-3710
FAX：073-474-2270
Email：maizou-1@wabunse.or.jp
URL：http://www.wabunse.or.jp/
印 刷 株式会社 協 和



和歌山城跡出土の古代瓦

地宝のひびき

—和歌山県内文化財調査報告会—

報告資料集

- 県内最大級の首長墓を掘る・
54年ぶりに開かれた横穴式石室
—和歌山市 天王塚古墳の発掘調査—
- 中世熊野の港と倉庫群
—新宮市 新宮城下町遺跡の発掘調査—
- 近世の武家屋敷と古代の掘立柱建物群
—和歌山市 和歌山城三の丸の発掘調査—
- 和歌山城北側地域における土地利用の変遷
—和歌山市 和歌山城三の丸の発掘調査—
- 熊野水軍の本拠・居館の様相
—西牟婁郡白浜町 安宅本城跡の発掘調査—
- 奉公衆山本氏の幻の館
—西牟婁郡上富田町 坂本付城跡の発掘調査—

公益財団法人 和歌山県文化財センター

〒640-8301 和歌山市岩橋 1263 番地の 1 TEL：073-472-3710

URL：http://www.wabunse.or.jp/